

第十章 江戸氏時代の文化

文化は政治上・経済上の変動とともに、あるいはそれを原因として流動し盛衰するが、政治や経済の動きに対してただ受動的な関係で変わるものではなく、また政治や経済の動きをそのまま反映するものでもない。それみずからの内部に固有の伝統をもち、政治や経済に対して独自の潮流をなして、歴史の海を流れるのが文化である。そして政治や経済と互いに影響しあい、時には政治・経済の動因に大きな作用を及ぼしながら、歴史を推し進めるのも文化である。しかし奈良朝・平安朝の治世や鎌倉幕府・室町幕府の治世のように支配者の権力が比較的強大で、これに対して一般人民の社会生活がなお比較的低い時代では、支配者の政策や好みが文化の発達の直接の動因となったり、また権力の盛衰、興亡によって文化の歴史にも明白な段落が刻まれることが多い。このことは常陸の文化史でも明らかにみられるが、とりわけ、室町時代の水戸地方の文化ではこの傾向がいちじるしい。それは中央で室町幕府の成立によって武家政治が発展し、武士階級の威勢が高まるとともに、水戸地方でも新興勢力である江戸氏の領国支配の体制が展開し、郷土の文化にも直接大きな影響を及ぼしたためである。

この時代、古代以来の文化の伝統をもつ京都では、従来の朝廷・社寺中心の公家文化のほかに、室町幕府、有力守護大名等の生活を地盤とする武家文化が加わり、禅の信仰に基づく思想・風尚によって洗練され、文芸・絵画・建築・造園・工芸・芸能などに独得の発展を遂げた。その頂点にあたるものが、かの東山文化である。前代とは異なり、京都が室町幕府の所在地として、名実ともに全国の中心となったから、その文化は幕府の支配下にある諸国の守護大名その他の領主をとおして地方に拡がった。一方、諸国では、守護大名などの領主階級の勢力・財

力が前代と比較にならぬほど強大となったので、その保護奨励のもとにそれぞれ郷土文化が発達し、城館の所在地が一地方または一地域の文化中心となった。江戸氏とその城府水戸の文化もまた、この室町時代文化の形勢を背景として眺めると、その実態と史的意義が明らかとなるのである。

第一節 文化の潮流と水戸地方

地域文化の中心

前代までの水戸は、馬場大掾氏の館の所在地であり、かつ吉田神社・薬王院などの名社大寺もあったから、ここが那珂川中流の要地としての位置を占め、その地域の文化の中心となっていたことはいうまでもない。しかし、大掾氏の本拠は府中（石岡市）にあり、府中は奈良時代から国府の地として、また国分寺・総社の所在地として、常陸の政治・文化の中心であった。さらに鹿島神宮が鎮座する鹿島では、神威が常陸国全体に仰敬され、神領も諸所にあり、大掾氏の一族鹿島氏がここに拠って、常陸南部の一勢力となったので、地方文化の中心として鹿島の地位もまた軽視できない。常陸奥郡では、鎌倉時代から佐竹氏の城府として続いた太田を、その地方の文化中心とみることができる。このほか小領主たちが諸所に散在していたので、それらの本拠が同様に地域々々の中心であった。水戸はこのような地域的文化の中心の一つとして考えられる。その上、水戸という地名はまだ城府の名としては使われず、城下の集落も町並みとして発達したわけではなかったから、地域文化の中心といっても、近世の小大名の城下とその領地村々との関係のような集中性・求心性をもつものではなかった。

これにくらべると、江戸氏の城府となった水戸は、同氏の領地が那珂川の両岸にまたがり、かつ下流の平野および南方に拡大し、その支配が強固となるにしたがい、政治上でも文化上でも集中的・求心的な位置を占めるようになった。詳しいことは判明しないにしても、城郭が水戸の台地の先端に築かれ、家臣の城下居住もある程度進められ、道路が開かれ、町家もいくらか立ち並んだ有様が推測される。また江戸氏が吉田神社や薬王院などを厚く保護して、兵火に焼けた建物を再建し、さらに城下に菩提寺・祈願寺として和光院・円通寺・藤福寺などを建立したので、水戸の文化的な景観は、ますます近辺に重きをなした（第三節参照）。このような形勢は、戦国時代の末頃、江戸氏の勢力の最盛期には大いに発展して、少なくとも那珂郡・茨城郡の地域では、ほかに並ぶ所もない重鎮となったと考えてよい。当時、常陸では牛頭（ごず）天王の信仰がひろく行なわれ、諸所に天王社が建てられ、その祭礼が賑わった。水戸では城内に天王社があり、和光院旧記によると、天正十八年六月の恒例の神事には、遠近の客が到来して賑わったという（1）。牛頭天王は災厄を祓（はら）う神として諸国に祭られたが、その中、京都八坂の祇園祭と尾張の津島の天王祭がもっとも名高く、民衆の生活に深く根差す信仰風俗の一つである。したがって、水戸の天王祭の賑わいから、当時の城下が近在の郷村生活の中心的位置を占めていた様子も推察できるであろう。

つぎに江戸氏時代の水戸にあった社寺を調べて、それを表示しよう（2）。その所在地の区域は現在の市街地に限ることとし、江戸氏の時代以前からあったものや、そのように伝えられるものは区別して記す。「城内」は徳川氏時代の地域を指し、その他の地名も大部分同時代の地名を用いた。

第 1 表 江戸氏時代およびそれ以前の水戸地域の社寺一覧

所在地	江戸氏以前	江戸氏時代	備 考
城 内	愛宕権現	同左	佐竹氏時代袴塚に移る。
同		牛頭天王社	明応（又永禄・天正）勧請、徳川氏時代天王町に移り、さらに上河内に移る。（素鷲神社）
同		天王社別当安養院	徳川氏時代南町へ移る。
同		浄光寺	佐竹氏時代湊へ移る。
同	水戸明神	同左	後吉田（さらに笠原）に移る。
同		和光院	大永二年江戸氏鹿島郡神生村から移建、天正十八年火災。
同	三宝荒神	同左	佐竹氏時代（又徳川氏時代初）赤沼、後七軒町に移る。
同		春日神社	応永勧請、江戸氏亡後、田谷に移る。
同		蓮乗寺	永禄元年建立、後木沢村、古宿に移る。
常葉村	弥富寺	円通寺	元亨三年大掾氏建立、文明中江戸氏により再建、同氏の菩提寺となる。のち佐竹氏追放す。
同	神崎寺	同左	平安時代建立（推定）、江戸氏時代再興。
同		林光院	大永二年建立。
中 町		珠賢寺	永禄建立。
大 坂		別雷皇大神	佐竹氏時代神生平に移る。
大坂横宿		金乗院	江戸氏時代（推定）。
鷹匠町		善重寺	乱世廃寺、天正十四年現地に再興。
藤沢小路		善徳寺	天文三年建立、寛永、鳥見町へ移る。
同		不断院	文明十七年建立、元和十年鳥見町へ移る。
上寺町		妙経寺	永禄二年建立。
竹 熊		持福院	江戸氏時代（推定）。
同		宝蔵院	同左
同		藤福寺	寛正二年建立、当時亀田という、佐竹氏時代後梅香に徳川氏時代、那珂郡小田町に移る。
作 町	三宝荒神	同左	
新宿古館		清岩寺	大永元年建立、現吉田台町。
吉 田	吉田神社	同左	
同	薬王院	同左	
同	笠原神社	同左	後笠原に移る。
酒 門	酒門神社	同左	

（右の中、愛宕権現・三宝荒神などは、江戸氏以前から城地にあったか、どうか明らかでないが、由緒は古いので、一応江戸氏以前としておく）

この一覧表によれば、江戸氏時代の水戸（徳川氏時代の城下、現在の主要市街地）にあった寺院は一七寺、神社九社を数えることができる。城下にこれだけの社寺があった事実は、この時代の水戸の繁栄を物語るものである。これにくらべると、馬場大掾氏時代の社寺は僅少である。とくに大掾氏縁故の寺はほとんど見えず、その上大掾氏の本拠府中の寺院の由緒にも、応永末頃に大掾氏が水戸を失った時、同地から移ったという所伝も見あたらない。これは大掾氏縁故の寺院の滅亡という特殊事情によるものかもしれないが、それにしても、これほどまで寺院がないのは、やはりその時代の寺院建立がはなはだ少なかったためであろう。このことからまた、大掾氏時代では、水戸の地がまだ城府として建設されなかったことを推測できよう（第六章第一節参照）。

このように水戸が江戸氏の時代には、那珂川中流・下流の地域の文化中心となったことは明らかである。しかし常陸、または関東地方の文化史という見地から眺めた水戸は、全く局地的な位置から少しも上昇していない。このことは、当時の僧侶・連歌師などの東国紀行を読むと明らかである。室町時代の半頃から、僧侶・連歌師の諸国遊歴が盛んとなり、とくに東国・北陸に吟遊の旅をする者が多かった。彼等に行くさきざきの名所旧蹟を見物し、また地方の都市、豪族の館、寺院などを訪れて連歌を教え、歌会を開いた。その中、心敬（しんぎよう）・宗祇（そうぎ）・宗長・宗牧などの東国紀行が名高いが、関東地方では当時もっとも文化が発達していた相模・武蔵の歴遊・滞在が多く、そこから下野の佐野・宇都宮への来遊もまた少なくない。その旅の目的の一つは白河関への吟遊であって、宇都宮から那須野を越えて白河にいたり、関址に立って懷古の情にふけり、関の先に広がる奥州の未知の風土に思いを馳せて帰途につくのが最大の旅程であった。そして常陸方面へとくに旅程をのぼす場合でも、筑波山と鹿島とがその目的地であって、

それから北部に向かった例は全然見受けられない。

たとえば、聖護院道澄の廻国雑記（文明十八年）によると、相模・武蔵を経て下野宇都宮まで行き、それから引返して常陸国にはいり、小栗を通り、桜川を渡り、筑波山に参拝して下総へ向かっている。また宗長の「東路（あずまじ）の津登（つと）」（永正六年）によると、相模・武蔵から上野を巡歴し、下野では佐野・足利学校・鏝阿（ばんな）寺などを見てから、鹿沼をへて日光山に参拝し、宇都宮から白河行きの予定を洪水のため中止して、上野に引返し、佐野の舟橋の址を見物して武蔵にもどり、忍・鉢形・菅谷・江戸から下総の中山・小弓・市川を訪れたのち、ふたたび江戸を経由して鎌倉にもどった。かれらはいたるところで、その土地の領主の館、または寺に宿って、連歌を興行しているが、常陸の水戸や太田などには全然来遊したことがない。これは、この地方では、上方まで聞えた名所旧蹟とてなく、その上、武蔵や相模などよりも文化の花の咲くことが遅く、旅馴れた吟遊歌人たちの心を引きつける力が薄かったためである。

このように室町時代の関東地方の文化状況では、武蔵・相模などにくらべれば、常陸はまだ開けず、そして水戸はその一地域の文化中心にすぎなかった。

江戸真純の歌会

廻国の僧侶や連歌師は、京都をはじめ諸国の様子や出来事を地方に知らせ、学芸を伝えたので、どこでも歓迎されたが、地方から京都に上って都の繁栄を目のあたりに見、その文化を学び取ろうとする者も少なくなかった。三条西実隆の日記を見ると、北陸・関東地方や陸奥の地方から、学芸を好む人々が上洛して彼に面会し、連歌の添削を請うたり、色紙・短冊を求めたりした記事が実に多い（3）。三条西実隆（康正

元年、一四五五 - 天文七年、一五三七) といえ、東山時代から戦国時代にかけて京都の学問文芸の第一人者であり、とくに歌道では宗祇から古今伝授を受け、公卿としては内大臣にまで進み、常に皇室の衰えを嘆いて地方の大名たちの勤王を励ました人物である。その日記の延徳元年（一四八九）九月十日に、つぎのようなことが記されている。

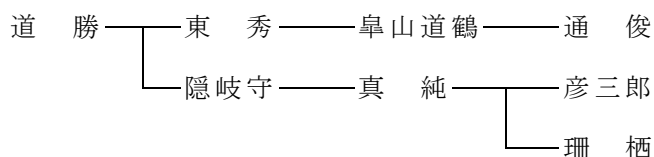
「江戸入道真純が飛鳥井大納言入道栄雅（雅親）の邸で歌会を催し、その会には実隆・猪苗代兼載（連歌師）をはじめ歴々の歌人たちが出席した。歌会が終わってから酒宴を開き、傾城（けいせい）二人と、観世太夫の音曲歌舞があり、夜に入って散会した」

その後、三一年をへた永正十七年（一五二〇）九月十四日の日記には「江戸真純は当時蓮仏（又は蓮阿）と号し、明日常陸に下向するとて暇乞いに来訪したので、一盞（洒一献）を勧めた。そして去る延徳元年の歌会の際、その前日九月九日飛鳥井栄雅入道から実隆に宛てた書状を、このたび蓮仏が所望したので、日記から切り取って与えた。また蓮仏の息女に墨一挺を遣わした」

その蓮仏（蓮阿弥陀仏を略して蓮阿または蓮仏という）は大永七年六月、常陸から熊野詣でに上った時にも、京都の三条西邸を来訪し、実隆に歌評を乞い、色紙・扇面・短冊などに染筆を求めて常陸に帰った。

（大永七年六月十二日・十四日・十六日・二十一日・二十四日の日記）

この歌道熱心の江戸真純（蓮仏・蓮阿）は時の水戸城主江戸氏の縁者に違いない。そこで佐竹家中総系図の江戸氏系図を見ると、次の系統で真純なる人物がでてくる。



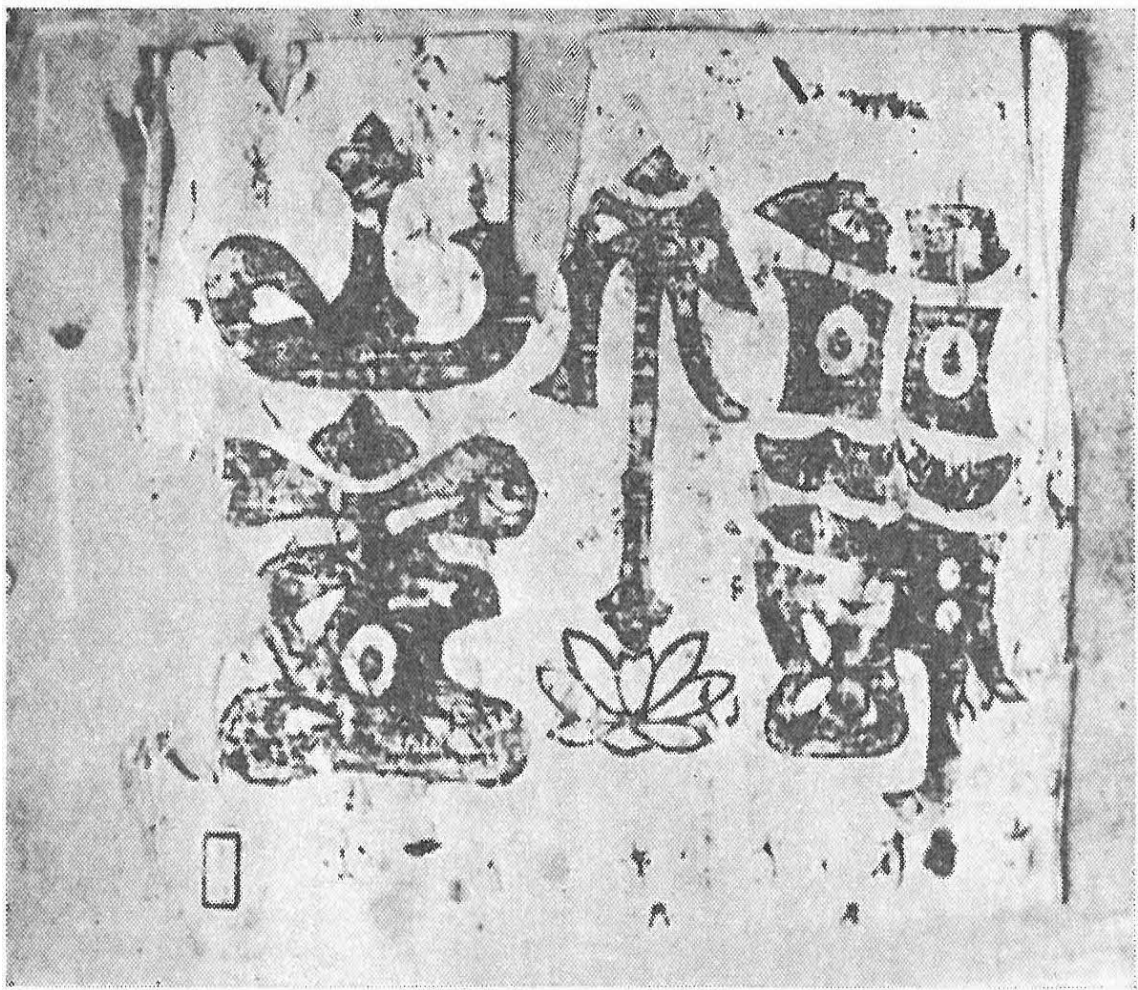
道勝は江戸通房（応永末年、水戸に進出、水戸城主第一代に当たる）の法名、東秀は通房の長子通秀の法名で、べつに洞勝の法号もある。皐山道鶴は、通房の第二子通長の法号で、この子孫が水戸城を代々継いだのに対して、東秀の弟隠岐守（通治）は那珂郡鳥子（とりのこ）（美和村鷺子）に分家した。右の系図では、真純はこの鳥子江戸家の祖通治の子に当たる。ところが、水戸市外の六地藏寺の過去帳にも、「真純蓮阿弥」の法名が書き載せられている。実隆を訪うた真純は鳥子城主江戸通治の子であるに違いない。この鳥子江戸氏はその後、天正十八年水戸の本家が没落した時、それと運命を共にせず、佐竹氏の家臣となり、秋田にまで移ったのである（第八章第一節参照）。鳥子といえば、下野に近い片田舎である。そこの田舎武士が京の公卿たちと交わり、連歌会を興行したことは、その教養と財力とを示すものである。本家の江戸氏の文芸は伝えられてないが、恐らく、水戸でも連歌が行なわれたことであろう。すなわち真純の文芸は、水戸地方の文化の一端がたまたま実隆公記に記されたので、今日その遺芳を知ることができるが、その他の事蹟は江戸氏の滅亡と共に亡び去ったのであろう。

熊野信仰と富士信仰

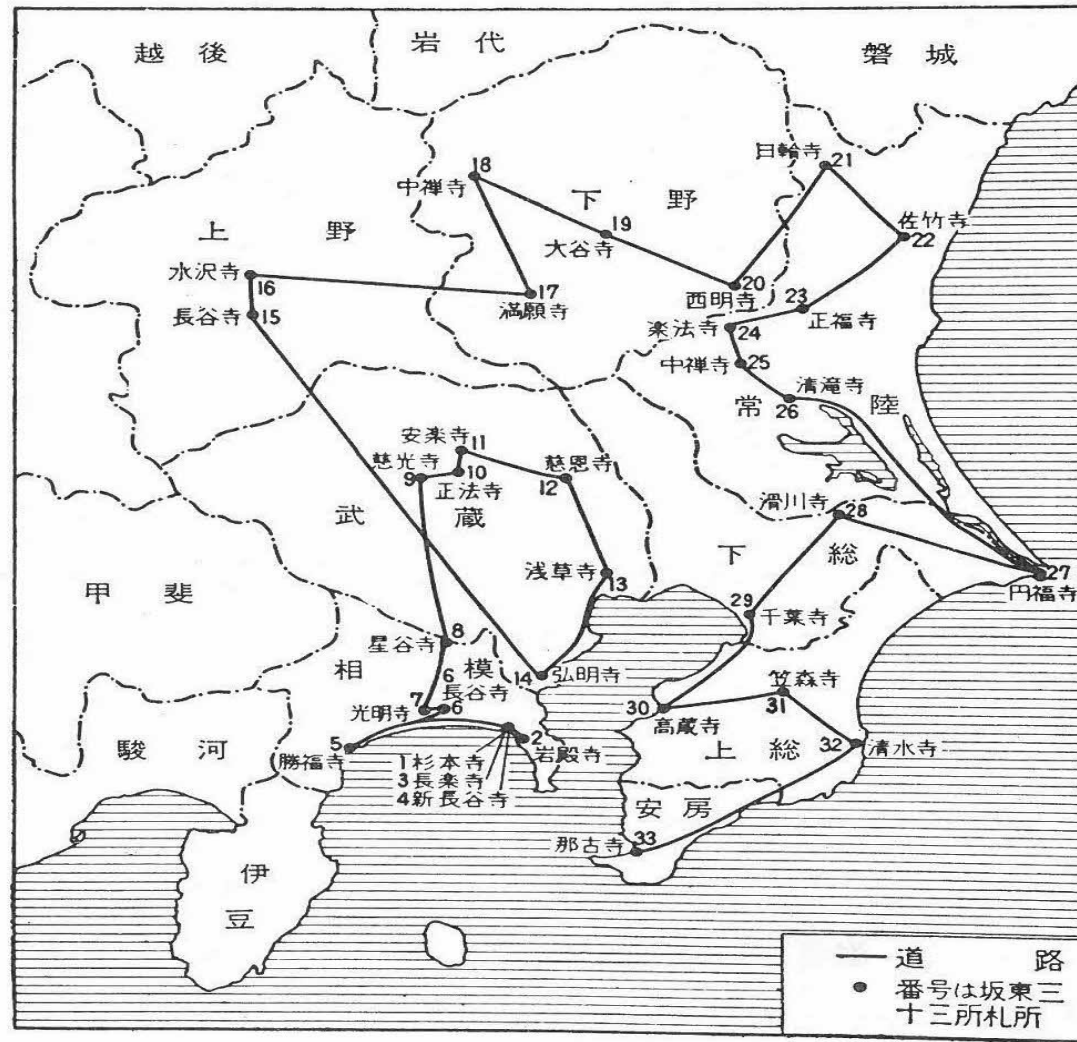
一般に文化の歴史について最初に説明したとおり、支配者の勢力の盛衰興亡がその地方の文化に大きな影響を及ぼすことが多い。しかるに文化の性質は、本来権力による拘束や政治情勢から及ぼす影響などにかかわりなく、独自に発展し拡大する力を持つものである。その上、文化が発展し拡大する力が権力関係や政治情勢に影響を及ぼして対立をやわらげ、分立をゆるめて、同化作用を発揮する場合もある。室町時代の政治情勢では、幕府の統制力が弱く、諸大名の自立的勢力が強かったので、地方分権の形勢が続き、戦国の世にはほとんど国家権力の

統一性が失われた。それにもかかわらず、国民の伝統的な結合性が保たれたわけを考えると、天皇の権威と京都の文化とが帰一的・求心的な力をもっていたこと、および神仏の信仰が諸大名の分立抗争の壁をも浸透して、諸国の人々の心を結び合わせたことなどが精神的原因となっている。

神仏の信仰では、とくに伊勢信仰と熊野信仰とが鎌倉時代から盛んとなって、室町時代には諸国の武士および民衆にまでひろく行なわれた。そして伊勢神宮参詣・熊野三山巡拝の風習は、戦国の世にもますます流行し、その祈禱・護符・供物が地方の信者に尊ばれた。



第1図 牛玉宝印 一図説日本文化史大系一



第2図 坂東三十三番札所と巡礼札 一図説日本文化史大系一

戦国末まで諸国の大名が誓詞を書く時に好んで使った熊野牛王（ごおう）（正しくは牛玉と書く）は、熊野発行の神符で、牛王宝印（牛の胆膽（きもい）からまれに発見される霊薬の宝印）を印刷したものである。熊野では地方の信者の参詣を世話する御師（おし）があり、地方には御師と連絡をとって参詣案内役にあたる先達（せんだつ）がいた。伊勢では御師が地方の信者と神宮との間を斡旋した。一般に信者は檀那（だんな）と呼ばれ、地方ごとにまた同一氏族ごとに御師の持ち分がきまっていて、その権利が譲渡されたり売買されることもあった。

このほか、仏教では高野山の信仰が宗派の別なく盛んとなり、諸国の大名でこの山の寺院と特別の縁故を結んで納骨する者が多く、また高野聖（ひじり）（高野山の行人の一派で諸国を巡歴勧進し、また物を売り歩く）も増した。さらに時宗の遊行（ゆぎよう）僧が諸国を遍歴して、往生札（南無阿弥陀仏決定往生六十万人などと記した紙札）を配布した。

東国では、熊野信仰と同じ形で富士信仰が行なわれた。また諸国の観音を巡礼して札を納める風習が発達し、四国八十八番札所・西国三十三番札所・坂東三十三番札所などの巡礼に旅をまわる民衆が多くなった。坂東三十三番札所のうち、常陸の札所は、二十番下野芳賀郡益子の西明寺のつぎに、二一番日輪寺（久慈郡金砂村、以下旧町村名で示す）・二二番佐竹寺（同郡佐竹村）・二三番正福寺（西茨城郡笠間町）・二四番楽法寺（真壁郡雨引村）・二五番中禅寺（筑波郡筑波村）・二六番清滝寺（同郡小野川村）で、二七番は下総銚子の円福寺である。水戸地域には札所はなかった。

このような神仏信仰、社寺巡礼が諸大名の分立割拠と対立抗争にかかわらず、中央の文化と地方の生活とを結ぶ糸となった。その上、これには武士だけでなく民衆が加わっているので、地方の民衆生活の発展

を見ることができる。ただ惜しいことには、神仏信仰、社寺巡礼は政治や軍事と違って、記録されて後世に史料を残すことが少ない。とくに民衆生活関係の史料ははなはだ少ないので、その有様を生き生きと描き出すことができない。常陸でもこれらの信仰、巡礼が武士・民衆の心を豊かにし、水戸地方の人々もその中にあったことは十分に推察できるが、詳しいことは知るよしもない。ここでは比較的史料のある熊野信仰と富士信仰について語ろう。

常陸の久慈郡から陸奥の東白川郡にはいると、棚倉より手前に八槻（やつき）という古くからの宿駅があり、ここに近津（ちかつ）明神が鎮座する。この近津明神は三社に分かれて中宮が八槻、上宮は棚倉、下宮は久慈郡依上（よりかみ）にあり、別当大善院はこの地方から常陸にかけて修験道の中心であった。修験道は山岳を信仰し、峯入をして修行を積み、靈力をえて加持祈禱を行ない、民衆の苦難を救済する宗教で、その行者が山伏である。紀伊の熊野は修験道の聖地であり、八槻の大善院はこの熊野修験の大先達であった。

現存の八槻文書には、佐竹・白河・芦名をはじめ諸大名の書状があって、熊野信仰の盛んなりし古を今に物語っている。常陸では筑波山・八溝山・金砂山などがあり、鎌倉時代から修験道がひろがった。沙石集に、常陸田中庄（筑波郡）の先達高観房に犯された百姓夫婦が、師檀関係の先達に恥をあたえることをさけるため、奥州に逃げた話がある。また大部（飯富）の平太郎の熊野詣でのが、親鸞上人絵伝に出ている。これで熊野信仰が百姓にまでひろがっていたことがわかる。

前に記した江戸真純は、熊野詣での帰りに京都へ立ち寄ったものであるから、常陸に熊野信仰が行なわれた一例としてよい。また熊野御師のうち、常大坊は日本全国の佐竹名字の者を檀那としたが、常陸の佐竹だけは、廊之坊と中分した（4）。これに対して実報院は、那珂郡の

方にも檀那をもっていた。

ひたちの国さたたけ中さい

(石ツカ) 孫太郎 (宮田山八在所) 太郎兵衛 (滝田国井) 助次郎

(山田) 三郎衛門 (秋山) 六郎四郎

弥太郎

御師実報院

永正五年卯月廿三日 (5)

このうち、「さたたけ」は「佐竹」、[中さい]は「那珂西」であり、石塚・国井など、水戸に関係深い土地もみえる。これらの檀那はすべて姓を持たないから、百姓に違いない。これより先、南北朝時代の暦応二年に岩城地方の熊野修験の先達下船尾の大宝院の檀那譲状に、「佐竹小河殿、同御兄弟、国井」とあるが、この国井は水戸の国井であるかどうか明らかでないが、もし水戸の国井であれば面白い。

このほか、まず陸奥棚倉から常陸久慈郡にかけて一族が広がっていた二階堂氏は尊勝院の檀那で、そのうち、久慈東棚谷の地頭二階堂氏が南北朝時代の応安の頃、熊野に参詣した。

「二階堂 (包紙) 一門参詣之覚」

「二階堂 (端裏書) 一門ひたちの国」

常陸国

久慈東棚谷 (タナヤ) 地頭

二階堂隠岐方対馬守貞以入道参詣事

先達助律師 幸弁 (花押)

応安八年二月十六日

沙弥看貞 (花押)

執行

尊勝院

御房

これが、その時の御師の文書（6）である。また応永六年、中院正坊は廓之坊に、常陸小田・宍戸・筑波郡・の地下一族田中庄の檀那を代錢三五貫文で売り渡し、文明二年、覚真は廓之坊に、常陸行方郡全部の檀那、麻生・島崎・手賀・玉造・府中・竹原・鹿島郡全部（宮中は除く）の檀那（以上本先達府中民部）を代錢一八貫文で、翌三年、常陸東条郡全部、信田庄（以上先達円林房門弟）、江戸崎（先達二位律師安恩蔵坊門弟）などの檀那を代錢二八貫文で売り渡した。さらに天文十八年、多門坊は勝達坊に、常陸小栗（先達山田慶城坊門弟）・田中庄・海老島・大嶋・北条（以上先達熊野堂門弟）・下館（先達羽黒山別当）・下妻（先達大串不動坊）・関（先達平方栄城坊）・大宝・和賀八村、下総匝瑳（そうさ）および豊田（先達北池谷光福寺）・山川などの檀那を五貫文で売り渡している（7）。江戸または水戸を記した例は見当たらないが、これはこの地域の檀那を持ち分とした御師の文書が伝存しなかったためではなかろうか。水戸の袴塚には、この地方の修験の先達大光院があり、その他、河和田の宝蔵院・東覚院・万宝院があったから（8）、熊野信仰が盛んであったことは確実としてよい。その上、六地藏寺過去帳に明金比丘尼が「熊野詣三度」と記されている。また新編常陸国誌（巻九氏族）によると、熊野山願文明徳二年十二月二日、飯島七郎光忠、子息宗忠、応永十一年十一月二十二日、常陸国那珂西飯島住人悉知左衛門尉宗忠、同七郎五郎通忠とある。（飯島は現市域）以上の例を考え合わせると、水戸付近の武士・民衆にまで熊野信仰が広がった事情を推測できよう。

富士信仰は室町時代の中頃から、とくに東国に盛んとなったもので、

名山富士を信仰の対象とし、その富士浅間大神と仏教の大日如来とを同一と信じて、心身を清浄にして登山し祈願をこめるのである。その信者は檀那と呼ばれ、その登山する者を道者（どうじや）と呼び、御師が諸所の檀那を持ち分とし、道者が先達にひきいられて登山する時には、その宿坊となり道案内となった。そして戦国時代には、富士講が発生し、徳川氏時代に入ると、江戸をはしめ、諸国の都市・農村に拡大した。徳川時代の富士講中で伝えられた記録によると、開祖角行（かくぎよう）は天文十年長崎に生まれ、永禄元年諸国を修行して常陸国に行き（水戸藤柄町で勤行という修験の弟子となったと伝えられ、また土浦の旭台で旭日を拝したともいう）奥州脱骨（だつこく）（達谷（たつこく））の岩屋で行を修し、さらに富士の人穴に籠って、正保三年（一六四六）に死んだ（9）。

富士山の劔ヶ峯の麓の大日如来像には「延徳二稔庚戌仲夏十二日、檀那真壁之幹・白川弾正少弼政朝」等の文字が刻まれ（10）、また武田氏が関東の富士参詣の道者二百人を無事に通すべきことを、その領国内の諸役所（関所）に命じた文書（過所（かしよ）という）もある（11）。常陸の道者では、天正二十年、当時の甲斐領主加藤光泰が吉田の御師小猿屋隼人助に「常州下妻檀那所之儀、自二前々一其方存知来分、弥無二相違一可レ令レ存者也」という黒印状を与えている（12）。水戸地方の富士信仰を伝える直接の史料はないが、前記のように角行と水戸藤柄の山伏勤行との関係が伝えられているので、早くから何かの縁故があったとも考えられる。徳川氏時代の水戸地方では、富士講が盛大であり、今日でも、市域の村々に「富士山」「富士」などの地名が多いのは、その名残りであるが、あるいはその起こりを江戸氏の時代にまで溯（さかのぼ）らせることができるかもしれない。

以上のように、信仰が常陸一国または水戸地方だけに局限されず、

郷土の人々が遠い国々を巡歴し、また熊野や伊勢の御師・高野聖・遊行僧などが郷土に往来し、京都をはじめ諸国の文化との交流が促進されたことは、この時代の郷土文化の特色である。

注 (1) 中山信名著「新編常陸国誌」第十二巻風俗、「和光院旧記」。なお和光院年代記によると、水戸の天王社は明応中の鎮座という。徳川氏が城を拡張したとき、寛永八年木町（金町）、更に新木町（下金町）に移り、元禄時代に現在の天王町に移った。（「水府寺社便覧」、なお永禄天正頃の勧請との説もある）

(2) 石川桃溪著「水府地名考」高倉胤明編「水府寺便覧」「新編常陸国誌」および現存社寺の由緒書などによる。そのなかには建立の年代などが、確かな事実かどうか判明しないものもあるけれども、しばらく諸書の記事のままに収載しておく。

(3) 芳賀幸四郎氏著「東山文化の研究」

(4)・(5)「米良文書」五

(6)「潮崎八百主文書」乾

(7)「潮崎稜威主文書」二

(8) 愛宕神社所蔵安政三年御用留、河和田邑故城考

(9)・(10)「富士の信仰」第一冊富士の歴史、同第三冊「富士の信仰」（二冊共井野辺茂雄氏著）

(11) 上野石倉文書

(12) 刑部文書

第二節 神社の崇敬

起請文の神々

神仏の信仰は熊野・伊勢・富士浅間・高野山など遠国の大社寺だけでなく、常陸国内の社寺でも盛んであった。そのうち、寺院は京都の大寺や他の地方の諸寺と、宗派上の連絡があったから、やはり文化の潮が流れ込む入口ともなり、また住民の信仰を受けて、郷土の精神界の中心ともなった（次節参照）。しかし寺院よりも郷土性が強く、住民の郷土心を豊かに養ったものは、古代以来、郷土の生活と歴史を共にして来た神社であった。

一般に神社はその由来から分けると、氏族の神として祭られた氏神、その土地の開発の神として祭られた産土神（うぶすながみ）、その土地を鎮め守る神として祭られた鎮守神などがあるが、実際にはこれらの性質を併せ持つものが多く、大部分が郷土生活の中心となっている。これらの祭祀が氏族の団結や村民の協同に大きな感化を及ぼした。とくにその祭祀を行なう村落の制度として、宮座の発達が村民の協同組織の基礎となった意義は大きい。宮座とは郷土の神を祭る村民（氏神に対していえば氏子）の祭祀組合であって、鎌倉・室町時代から諸国に発達し、徳川氏時代にはもっとも盛んとなった。その事例は近畿地方をはじめ、諸国に数多く見られる。

室町時代の水戸地方では、宮座を記録の上に認めることはできない。しかし吉田神社の祭りに氏子の村々が奉仕する習わしは古来の制度であり、徳川氏時代にその祭礼風習がますます広く行なわれたことを考えると、たとえ宮座の制度が記録にないにしても、実質はそれに近い祭祀組織が民衆社会の中にあったとしてよからう。

さらに広く見れば、神威を畏敬する念は、日本人の心の中深く働い

て、古代から中世におよび、近世に続いている。護符を吞んで身の潔白の証とし、神水を飲んで誓約し、神の鬩（くじ）を引いて重大事件を決裁するなど、その例であるが、とくに鎌倉・室町時代から武家社会では誓約する場合、起請文（きししょうもん）を書いて神の名の下に誓いを立てる風習が広く行なわれた。起請文は熊野そのほか最寄りの地方の大社で発行した牛玉宝印（神符の一種、前節参照）を用い、約条を列記した後に、神名を数々記して、もし約条に違反する場合は神罰を蒙（こうむ）るべきことを誓うのが普通の書式である。この誓文の神々は仏教の梵天帝釈・四大天王などから、伊勢大神宮・春日大明神・熊野権現・石清水八幡・天満天神など全国に名高い大社をまず記し、その次には、誓約者の居住する地方の神の名を記すので、この起請文を利用して、その当時諸国・諸地方でもっとも崇敬された神社を確実に知ることができる。この方法で、水戸地方の実例をつぎに説明しよう。

永正七年（一五一〇）十二月二日、佐竹義舜が江戸但馬入道道鶴（通雅）・同彦五郎（通泰）親子に出した血判起請文（1）（熊野牛玉）記載の常陸の神々は次ページ第二表のとおりである。

この神々をみると、当時、熊野信仰とともに、稻荷・祇園の信仰が盛んであったことがわかる。なお、江戸但馬入道道鶴が小野崎越前守に出した起請文（2）には「当庄鎮守吉田・笠原」とある。同じく道鶴が好間・岩城両氏に出した起請文（3）には、「当国筑波権現・佐都・鷹山大明神・花園七社権現・鹿島大明神・太田八幡大菩薩・諏訪稻荷大明神・吉田・笠原・水戸大明神」とある。神を権現・菩薩などといったのは、奈良時代以来次第に発達した神仏習合思想による信仰が、この時代の水戸地方にも広く行なわれていたためである。水戸地方では吉田社が大社であるが、これと共に笠原・水戸両社は、この当時では格別の社格として崇敬されていることに注意したい。また河和田八幡（徳川

時代元禄の頃、吉田神社と改む）・大野稲荷などは、当時では栄えた神社であったから、起請文に記されたものと思われる。

吉田神社と吉田家

第2表 起請文に記載された神々（下欄は該当する神社名）

当国鎮守鹿島大明神	鹿島神宮（当国鎮守に注意）
筑波六所大明神	筑波山神社
息 栖	鹿島郡、息栖神社
大 洗	大洗磯前、酒列磯前両神社
静 宮	那珂郡、静神社
佐 都	久慈郡、佐都神社
鷹山大明神	久慈郡東河内上、高山明神
金 砂	久慈郡、金砂山神社
真 弓	久慈郡、真弓神社
花園二十一社	多賀郡、花園神社
太田八幡大菩薩	太田八幡社（佐竹氏神主）
□松大明神	不詳
吉 田	水戸吉田、吉田神社
笠 原	笠原神社（吉田社別宮）
水 戸	水戸明神（吉田末社）
早 俊	早歳神社（同上）
国 主	国主神社（同上）
酒 戸	酒門神社（吉田社の別宮）
飯 宮	飯宮神社（吉田末社）
二千五百諸大王子	熊野王子社（吉田末社）
河和田八幡大菩薩	水戸、河和田八幡社（徳川氏時代、吉田社に改む）
十二所権現	河和田、熊野十二所（推定）
大野稲荷・処々稲荷	郡珂郡大野、稲荷神社など
築山稲荷大明神	不詳
祇園牛頭天王	水戸その他諸所の天王社

江戸氏は権力を集中し領国支配体制を整えるため、社寺の保護・城下集中を計ったので、この時代の水戸の神社にはいろいろの新たな動きが起こり、また社の数も増加した。それらの出来事のうち、まず水戸地方第一の大社吉田神社が京都吉田家の配下に入った事情を説明しよう。

吉田神社は、その庄園と共に平安時代から京都の小槻氏を領家として伝領され、鎌倉時代に入ったが、延慶年中（一三〇八—一一）から、鷹司（たかつかさ）家の知行するところとなった。この事は吉田兼右（かねすけ）の日記（兼右卿記）永禄八年七月六日の条に記載された「常陸国第三宮吉田社領々家次第」でわかる。これには小槻氏の歴代を記したのち

「鷹司殿

為御朝恩御知行

自延慶年中至今」

と書いてあるから、延慶年中、鷹司家が朝廷から吉田社を下賜され、永禄当時まで代々伝領したことが明らかである。領家の権利が小槻から鷹司に移った事情は何も記されていないが、南北朝の争乱およびその後、一般に旧来の庄園の衰滅、領主の変動がはなはだしかったから、吉田でも同様な事情が起ったものかも知れない。そして鷹司家の支配も、わずかの礼物を取るだけで、実権は全くなかったことであろう。室町時代ではどの地方でも大名・豪族の領地支配力が増大し、京都の公卿・大社寺などを領家とする庄園支配が無効となったので、地方の社寺は、一方ではその地方の支配者である豪族の保護を受け、他方では京都の大社寺の配下に入り、宗団組織を作るようになった。とくに神

社は朝廷で代々神祇伯を世襲する白川家の支配を受ける制度であったが、室町時代には新たに吉田家が神道長上（ちようじよう）と自称し、吉田神道を創めて地方の諸社を配下に入れ、神社の位階・神職の資格・祭祀の制度まで、ことごとく自家の権限の下に免許した。水戸の吉田神社が永禄八年、吉田家へ取り入ったのは、このような全国的情勢の一例として理解できる。

永禄八年七月のことである。吉田神社の神主田所清恒は、それまで全く関係のなかった京都の吉田家に使僧をつかわして好誼を求めた。使僧は吉田社伝来の文書である文永八年十一月の三善某の下文・嘉暦二年十月の僧祐看の下知状、および常陸国第三宮吉田社領々家次第（前記）三通を持参した。この中、第一の文書は吉田社に写しが残ったが、他は残っていない。そして三通とも、吉田家と以前から関係があったことを示す文書ではなかった。それにもかかわらず、使僧は「吉田社の神官は田所氏であるが、もし吉田家から久しく無沙汰したという書状を下されるならば、来年必ず挨拶に参上する」と口上を述べた。吉田兼右はこれを承知して

久無音候、太不（はなはだ）可然候、急度（きつと）遂上洛、
社頭等執心専用候也、恐々謹言

七月六日 神道長上（花押）

常陸国三宮

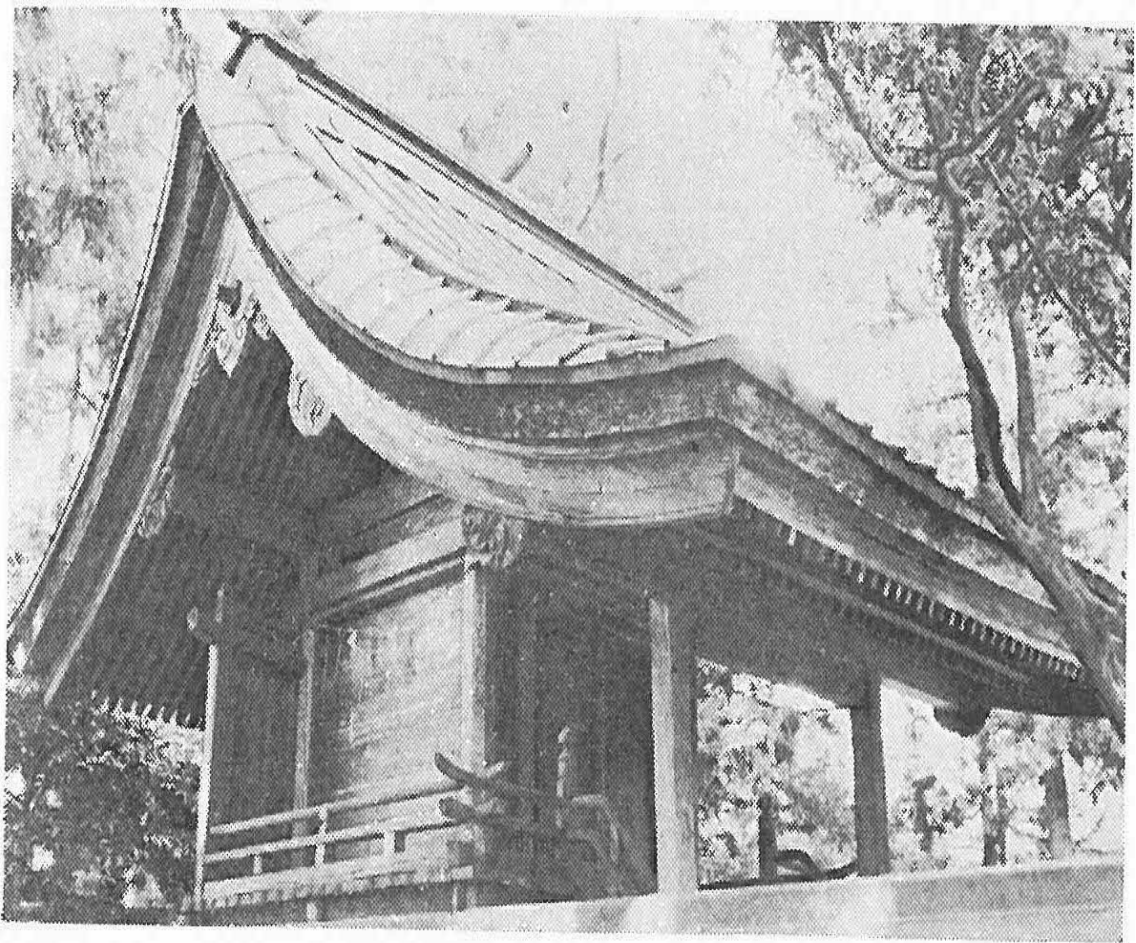
祠官殿

という書状を送った（4）。田所清恒はこの約束にしたがって、翌永禄九年には上洛して吉田家を訪問し、以後、吉田神社は神道長上吉田家の配下に入ったことであろう。水戸では吉田神社以外の神社でも、この

後おそらく吉田家の支配を受けたものが少なくなかったろうが、その事情は伝えられていない。

諸社の建立

吉田神社に次ぐ式内社である藤内・大井両神社も、この時代に神威の衰えることはなかった。その中、藤内社は永和二年（一三七六）大掾氏の家臣であった横塚道正が奉仕して以来、代々横塚氏が神主家を世襲した。次の永正四年の棟札（5）によると、この時、綿引通朝が大檀那として社殿を再建し、宥棟が導師をつとめた。宥棟は田野の不動院（真言宗）の住持である。



第3図 藤内神社本殿 — 藤井町 —

大行事帝釈天王

今日我師弥勒慈尊 大檀那綿引藤原通朝

封聖主天中天 碑文師文殊師利菩薩 願以此功德

普及於一切

已加陵頻伽声哀愍衆生者 △合惣戒師釈迦牟尼如来 我等与衆生
皆共成仏道

封我等令敬礼 証誠師大梵天王

諸行師普賢菩薩大聖宥棟阿闍梨

戒行夏観世音菩薩

永正四年丁卯十一月十日

この後、大永年中にも出火で焼失したが、文禄二年、藤井村住人綿引丹後などの力で若宮八幡が造営された。綿引氏は藤井村の領主で江戸氏に仕え、江戸氏滅亡の後、藤井に帰農したのであろう。また慶長二十年（元和元年）には、宥住を導師として月待供養が行なわれたことと永正四年の導師宥棟を考え合わせると、藤内社には吉田社の薬王院のように神宮寺（おそらく小松寺系）があったのではなかろうか。大井神社は応永の末、江戸氏水戸攻撃の兵火に焼け、永正年中社司松本刑部が再建したが、天正十六年神生氏の乱のとき再び焼失した。

そのほか、城内の水戸明神・吉田（後笠原）の笠原社・酒門の酒門社・元山町の別雷皇大神・上国井の鹿島社・柳河の神明社・青柳の鹿島香取社・元石川の手子后社など、江戸氏以前から由緒の古い神社も続いた（前節参照）。このうち、手子后社は紀伊国日前神社を分祀したもので、源義家が、東征の時社頭に旗を立てて祈ったと伝えられ、大永七年頃まで円照寺が神宮寺（6）であった。また谷津の立野社が天正中、大平雅楽之輔という者によって改築された。



第4図 手子后神社 一元石川町一

これら古社に対して、江戸氏の時代に新建された神社が少なくない。まず江戸通房が応永末頃に水戸を占拠したとき、藤原姓であるから、同族の祖神春日社を奈良から城内に勧請した。この社は江戸氏の滅亡後、田谷に移っている。また永禄九年には春日社が下国井に建てられた。さらに河和田の城主で江戸氏の重臣であった春秋尾張守幹勝は文明年中、河和田に八幡宮を建てた。前述の起請文に見える八幡社である。永正年中には、肥後菊池氏の一族石見守景安という者が、水戸に来て谷田に熊野社を分祀した。



第5図 素鷲神社 —上河内町—

木葉下（あぼつけ）の香取社は大永六年の勧請である。なお同地区の三ヶ野にも、帝生（みかのお）大明神という古い祭神が伝えられている。

上河内に現存する素鷲（そが）神社は常陸大掾平国香が京の祇園社を常陸に分祀したという縁起を伝えているが、永禄天正の頃、江戸重通が水戸城内に勧請して牛頭天王社と称したもので、その祭礼が賑わったことは前節に述べた。江戸氏滅亡の後、現地に移った。愛宕町の愛宕神社も平国香が山城の愛宕社から分祀したものと伝えられるが、元

亀年中、江戸氏が城内の地（後の三の丸）に移した。天正十八年、江戸氏を滅ぼした佐竹氏はこれを袴塚の三島山の現地に移した。この地方の修験の先達である袴塚の大光院は同社の神宮寺を兼ねていた（7）。天正十二年には、田野の鹿島社の遷宮が大檀那春秋兵庫助重元、助力者郡司土佐守・小藺若狭守によって行なわれた（8）。春秋氏等はいずれも江戸氏の家臣である。

以上諸社の沿革を見ると（9）、江戸氏の時代の勧請が目立っている。とくに吉田・鹿島・香取などの末社を水戸および近辺について調べると、大部分が江戸氏の時代の分祀である。この事実は、江戸氏の積極的な宗教政策とともに、その領内の郷村生活の向上を物語るものと思う。

注 （1）・（3）「秋田藩採集文書」一

（2）同三十四

（4）「兼右卿記」・「吉田神社文書」

（5）「藤内神社由緒書」戒

（6）「諸草心車鈔」四

（7）愛宕神社所蔵、安政三年御用留

（8）「常陸遺文」一

（9）「水府寺社便覧」による。

第三節 仏教諸宗の発展（一）天台・真言・禪

水戸地方に仏教諸宗派の発展が目覚ましかったのも、また江戸氏の時代である。前代まで常陸に拡がった主なる宗派は天台・真言両宗で、この既成仏教にくらべると、鎌倉時代の新興仏教では真宗と日蓮宗・時宗とが一部の地方に行なわれただけで、その教勢はなお弱かった。しかるに室町時代に入ると、浄土宗および臨済・曹洞の両禅宗もまたこの地方に教線をひろげた。こうして諸宗が押し並んで郷土生活と密接な関係を持つようになったことは、この地方の文化史上、画期的な意義を持つものである。次に諸宗ごとに教勢発展の状況を調べてのち、その史的意義を説明しよう。

天台宗

水戸地方の天台宗では、平安時代以来吉田神社の神宮寺であった薬王院がその中心をなしていたことはまず疑いない。この寺は鎌倉時代も連綿として続き、その住職は代々薬王院の別当と共に、下妻の大宝八幡の別当をも兼ねた。南北朝時代より江戸時代初期まで別当職は次の通りである。

良珎（嘉暦二年相続）－康珎（延文四年相続）－頼珎（応安八年相続）
 －満珎（応永十一年相続、永享二年入寂）
 －頼珎（文明元年入寂）－祐栄－頼禱－叡海－玄英－快舜（永正十二年相続、天文十九年入寂）－鎮舜
 －賢尊－尊忠（天正十九年入寂）－尊仁（慶長八年入寂）

この大寺院も戦国の世には火災を受けたが、水戸城主江戸氏の助成によって再建されたので、その法灯は引きつづき吉田の台地に高く輝く

ことができた。

時に大永七年六月十一日の夜、薬王院は火災により、本尊薬師如来などを除いて諸堂宇すべて焼失してしまった。これに対して、江戸通泰は早くも翌十二日、七箇条の掟書（1）（恐らく自筆）を送って、

「こん日御さうゑいせん（造営錢）二百貫文しんなう（進納）申べき事、御さうゑいニおいてハ、みちやす（通泰）ニ御まかせあるへく候」

と再興を援助することを約し、さらに祈禱精励・客僧宿泊の禁などをも定めた。その後同月廿三日、別当に出した書状には「今度あらためて万疋（錢百貫）の地を寄進することを、先日以来両三度申入れたところ、しきりに御辞退の上は、ともかくも尊意にまかせる」という意味のことを伝えている。通泰はこの時、父通雅（法号通義道徹）が薬王院を保護して定めた、寺家内の竹木伐採・男女下人使役の禁令に、新たに追加して、寺家寺領の者を伝馬飛脚・水戸城の堀壁普請などに徴用しないという特典を与え、なお薬師堂は堅（たて）七間に定められるべし、とも指図した。

こうして薬王院の再建工事は進行して、七月に材木取始、同年八年柱立、享禄二年八月九日上棟、翌三年十月八日入仏が行なわれた。その棟札（2）の裏面には

「大永八年三月廿日 大旦那前但馬守藤原通泰 御息彦五郎忠通次
男五郎三郎通延」

と大書されている。

当時、寺域には角坊をはじめ北・西・東・南・中の六坊などが存在していた。ついで鎮舜の代、天文十七年二月青蓮院門跡尊鎮法親王から「桓武帝勅願所」の真筆を賜わった。この頃から絹衣争論が起こって

いるが、これについては後でまとめて説明する。この後天正七年三月賢尊の代に、檀那江戸重通・助縁篠原縫殿允・海老沢四良太夫・館民部大輔・鬼沢若狭守・立原周防守などの合力を得て、伽藍の修造が行なわれた。

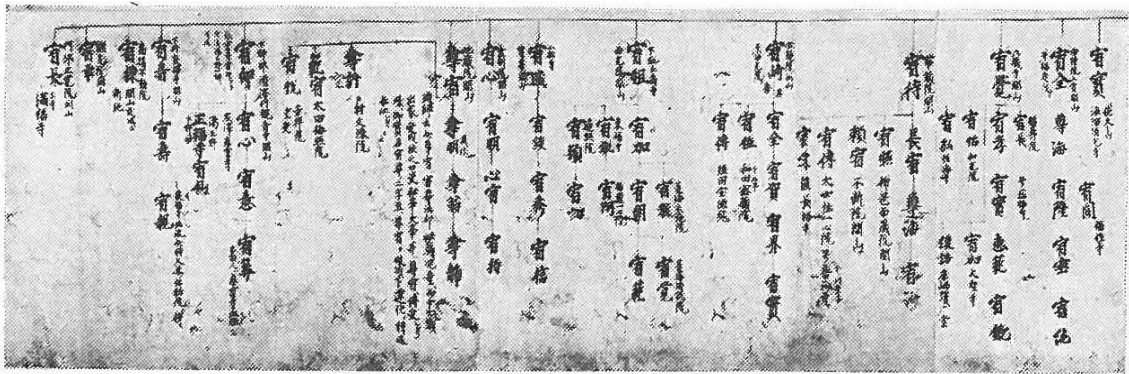


第6図 吉田薬王院山門の額（吉田薬王院所蔵）

この薬王院が郷土にいかに大きな勢力を持っていたか、それは佐竹氏が天正十八年（一五九〇）江戸氏を滅ぼして水戸に入った時、薬王院を自分の勢力の中に取り込もうとしたことでも、明らかである。佐竹氏は太田の一乗院をこの吉田薬王院に移し、江戸氏の一族である薬王院別当尊仁を退けて、佐竹義盛の子弘喜を一乗院の末寺久福寺（那珂町飯田）から入寺させた。このため、薬王院は天台宗から真言宗一乗院となった。その後、慶長七年（一六〇二）佐竹氏が秋田に国替えとなったので、薬王院では新たに水戸城主となった武田氏および京都の青蓮院門跡に訴願して元通り天台に復し、一乗院は向側の台地（台町）に移ることとなった（3）（後、久福寺の地へ移る）。

薬王院のほか、平安末期から鎌倉初期にかけてこの地方に建てられた栗崎の仏性寺・塩ヶ崎の長福寺・島田（のち磯浜）の西福寺・小幡の

法円寺・鳥羽田の円福寺・小鶴の如意輪寺・河崎（のち吉沼）の観音寺、そのほか西徳寺・満福寺などの天台宗寺院も室町時代まで続いた。しかし、この地方の天台宗は主として大掾氏の援助を受けて、ほぼ鎌倉時代末頃までに発展したので、その後は既成の勢力を維持するだけで、特別に目覚ましい展開は示していない。



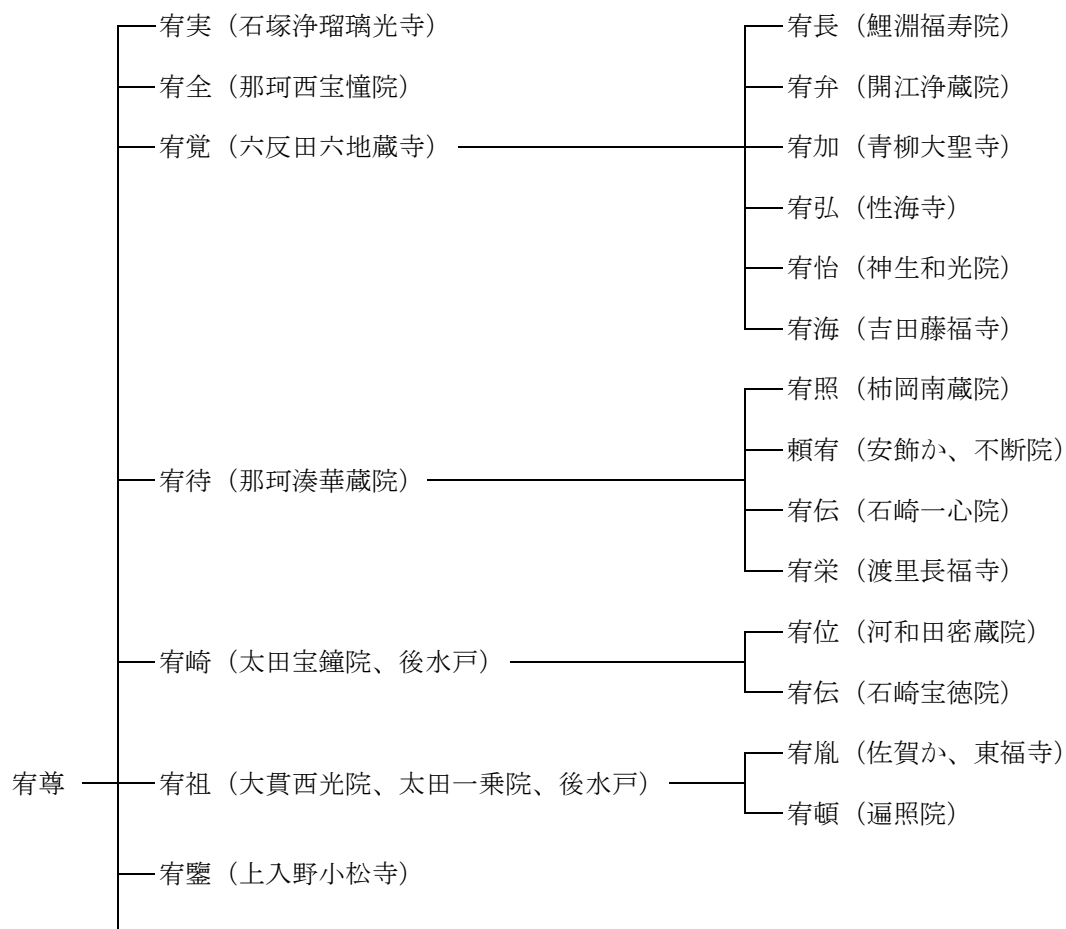
第7図 願行流血脈 (部分) (常北町小松寺所蔵)

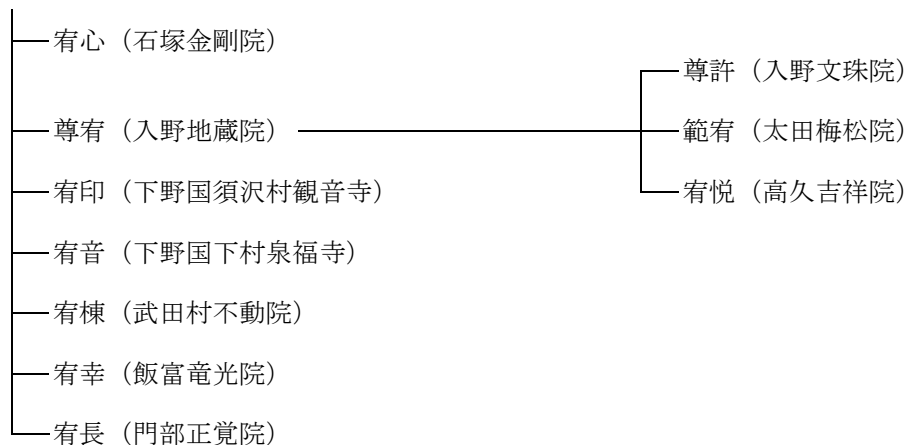
真言宗

大掾氏が主として天台宗を保護したのに対して、江戸氏は真言宗を援助したので、その時代には真言宗が活況を呈した。その中心は常北町上入野の小松寺である。小松寺は平安末の創立で、その後鎌倉末、大掾氏の勢力の後退と共に寺運も傾いたが、南北朝末の至徳三年（一三八六）、大掾頼幹が再興し、当代の名僧として聞えた宥尊を中興開山とするにおよんで、同寺はこの地方の真言宗の一大中心となった（4）。

宥尊は佐竹氏の家臣、那珂郡上岩瀬の白石志摩守の嫡子で、瓜連常福寺の第二世了誉の伯父にあたる。石塚の佐久山浄瑠璃光寺の上宥に入門し、ついで高野山で宝性院宥快に密教の奥義を学んで帰り、浄瑠璃光寺・小松寺、那珂西の宝幢院などに住して、宝徳二年（一四五〇）に没した（5）。

宥尊の法系は真言宗の中の願行流に属する。願行流は願行房憲静に由来するものである。憲静（永仁三年寂）は山城醍醐寺の座主頼賢の弟子で日光山の学頭を勤め、北条氏の帰依を受けて関東地方に布教し、その門下が宥＝－上宥－宥尊と続いたので、願行流の真言密教が相模・上野・下野・常陸その他関東一円に発展した。石塚の浄瑠璃光寺は宥＝が開き、那珂西の宝幢院は上宥が開き、宥尊に伝えた寺である。当時江戸氏は、大掾氏の勢力を駆逐して新たな領国支配体制の確立を急いでいたから、とくに従来の天台に代えて真言を援助したものであろう。こうして、真言宗は石塚・那珂西から那珂川下流にかけてひろがり水戸地方仏教界の主流となった。宥尊の門流がこの地方に展開した有様は、次の（6）法脈によって明らかである。





右の中、小松寺は宥尊・宥鑒ののちも代々栄えたが、第九代宥岳（天正頃）のとき、寺内の諸坊が建立され、伝法灌頂・法華八講などの重要な法式が整えられて、中興の名が高かった（7）。

次に水戸市の郊外、六反田の六地藏寺では、中興開山宥覚ののち、宥孝・宥実・恵範・宥鏡と続いたが、このうち恵範は当代きっての学僧として知られる。若くして讃岐善通寺・奈良東大寺・近江三井寺・山城醍醐寺等に修学し、六地藏寺のほか、栗崎の仏陀院、吉田の藤福寺などにも住み、天文六年（一五三七）七六才で入寂した。その文集に諸草心車鈔があり、また梵網古迹心車鈔をはじめ、著作や書写本が数多く六地藏寺に伝蔵されている（8）。

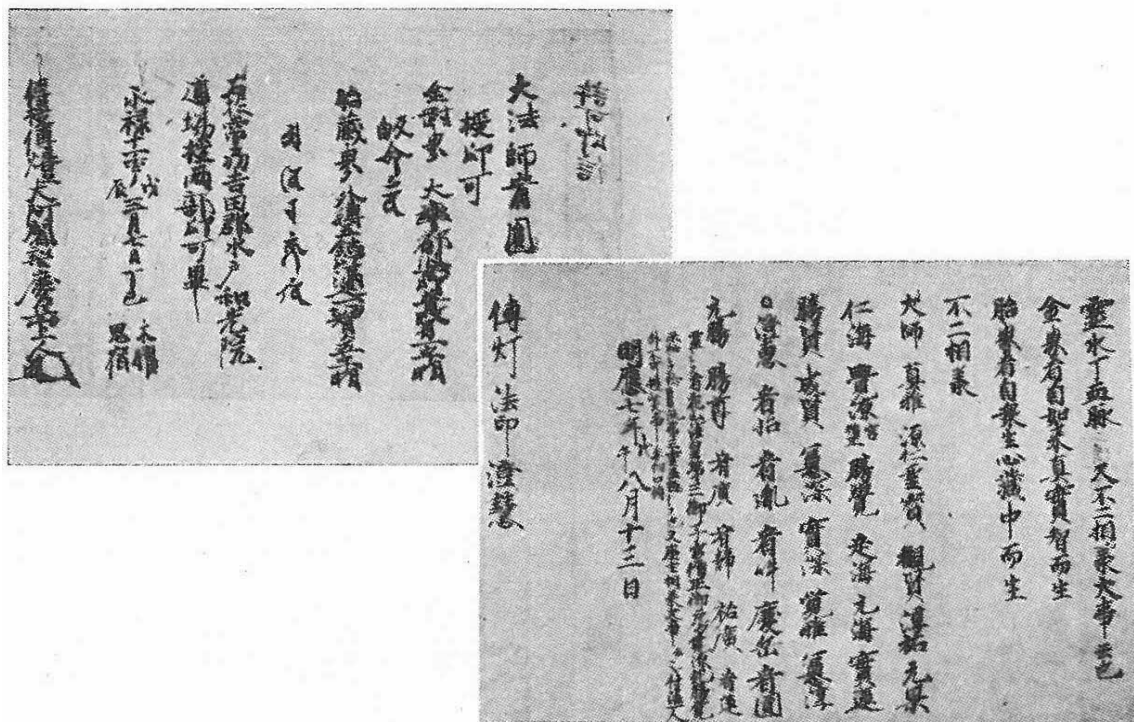
また和光院が大永二年（一五二二）、二世宥胤の時に、江戸通泰によって水戸の船戸山に移されたことは、江戸氏の真言宗保護の一例である。この寺は、はじめ康安元年（一三六一）、鹿島郡神生（石崎付近か）に創立されたといわれるが、この神生は鹿島町宮中の神野に神野氏があり、同地の神宮寺その他数寺ともみな真言宗であるから、石崎ではなく宮中の神野ではあるまいか。その後、一時衰えたが、宥怡（永正八年入寂）によって再興され、江戸通泰の父通雅が枝川七五貫文の土地を寄進してこれを助けた（9）。



第 8 図 六地藏寺過去帳と五山版妙法蓮華經

上・中は經典（全八卷）の首・尾、大永五年六月十六日の奥書がある。

下は過去帳の一部（六地藏寺所蔵）



第9図 和光院の印信 (内原町和光院所蔵)

通泰はこの父の志を継いで、枝川の寺領の代地として入野・大塚・金谷三カ所を与え、船戸山に移したのである。船戸山は徳川氏時代の水戸城北三之丸の海老窪の辺で、那珂川の舟渡し場があったので船渡山とも書いたという(10)。

この時から和光院は江戸氏の菩提寺として栄え、住職は宥胤(天文二十年入寂)の後、宥咩・慶岳(天正三年入寂)・宥円(天正十五年入寂)とつづき、次の宥勝のとき天正十八年江戸氏の滅亡によって佐竹氏のため水戸を追われ、田島に移った。和光院過去帳によると、天正年中の同寺信徒は田島・加倉井・池野辺・大足・杉崎をはじめ、牛伏・有賀・開江・赤尾関・内原・小原・鯉淵・宍戸などにまでひろがり、その身分には村落内の土豪・名主・百姓と推定されるものが大半を占めている。このことから、その頃の真言宗寺院の発展の地盤が村落社会に在ったことがわかり、江戸氏の真言宗寺院保護が領民支配に少なからず

役立ったことも推測できる。

さらに市内天王町に現存する神崎寺は、もと坏渡（あくつわたり）の笠原神社の神宮寺であって、その創立年代は明らかでないが、起源はおそらく平安時代まで溯ることができるであろう。前述の小松寺などとともに、のちに願行流に属するが、その時の中興開山は宥恕であった。貞享四年秋、境内の松の古木の下から、長承二年（一一三三）の銘がある経筒が発掘されたことは有名で（第五章第四節参照）、この年号からこの地に平安時代寺院があったと推定される。ただしその当時神崎寺といったかどうかは確証がない。この寺所蔵の古太鼓の銘が伝えられている。

南無天鼓雷音仏井 此度之本願宥意六十四歳

根来寺泉蔵坊張之 神先寺当代寺主宥意（花押）

為上求菩提下界衆生 二度目細工忠悦息太蔵允

神生宿忠悦斎御作 慶長二年丁酉三月三日甲午日

永禄十二年巳己七月十二日 胴ハ町井土佐守、皮之助力

神先寺宥俊（花押） 西町同東蔵坊

起信之 為現世安穩後生善処也

南無大悲観世音并

この神崎寺の太鼓はもと水戸城中に伝わったが、享和二年十一月、水戸藩から同寺に返した。その太鼓の皮が破れた内側には、前ページのような銘文（11）が発見された。これについては、時の水戸藩寺社奉行藤田主膳貞正の由来書が添えられている。

銘文の体裁に少し疑わしい所もあるが、現存しないので正すことができない。文意によれば、永禄十二年七月宥俊の代に神生宿の忠悦斎

が作り、皮は根来寺（紀伊国）泉蔵坊が張った。この後、慶長二年十月、宥意の代に町井土佐守・西町東蔵坊の助力により、忠悦斎の息子太蔵允が二度目の細工をしたのであった。

なお水戸地方の真言寺院には、細谷の宝蔵院（文明二年賢善の開基、天和三年現在の谷田町に移る）、全隈の普門寺（開山は檀海、のち桂岸寺と改称、天和三年現在の松本町に移り、二十三夜尊で名高い）、渡里の勝幢寺（中興、宥淳、檀那春秋駿河守）、河和田の地藏院（文明五年、江戸道照開基）・永福院（天文十三年宥海開基）をはじめ、元石川の円照寺、赤尾関の満徳寺、酒門の瓔珞寺、水戸の真寿坊、青柳の長福寺・浄泉坊、河和田の金剛寺十王堂（以上・諸草心車鈔）、水戸の珠賢寺、大塚の光明院・満福寺、大坂横宿の金乗院（以上和光院過去帳）などを古記録から拾い出すことができる。このように、現在の水戸市域の内外に真言宗寺院の展開ぶりは目覚ましかった。

絹衣争論

この争論は、常陸の天台宗と真言宗との間で、絹糸着用の特権について起こった訴訟事件であるが、天文から慶長まで続き、水戸地方の仏教界の最大の紛争となった。この五〇年余の長期の係争の中に、当時代の仏教界の事情、および領主権力と仏教との関係が明らかに現われている。

絹糸とは素絹の衣（ころも）である。天台宗の寺では、もともと絹糸の着用を正式に許されていたが、真言宗の末寺では着用できなかった。ところが、室町時代の後期に水戸地方に目覚ましく発展した真言宗の門徒は、領主江戸氏の援助で勢威を強め、天台門徒にならって絹衣を着用するようになった。これに対して、天台門徒の側から抗議を出したので、両門徒の間に争論が起こり、ついに天台門徒から本寺である

京都青蓮院門跡に訴え、門跡から朝廷に奏上（そうじょう）した。朝廷では天文二十四年七月「絹衣着用の事は法中の威儀で、自他の混乱をなすべきものではないのに、真言門徒が本寺の法度にそむき他宗の衣鉢を犯用し、新儀を勝手に行なって争論に及ぶことは、その道理なし（12）」との趣旨で、真言宗末寺の絹衣着用を禁じ、天台側を代表する常陸信太郡江戸崎の不動院に、綸旨を下してこの事を伝えた。

しかしこの争論の背後には、従来水戸地方の仏教界の主流を占めていた天台宗と、新興の勢いに乗る真言宗との深刻な対立があったから、このまま無事に治まるものではなかった。すなわち、この後も両宗の争いは京都の本山までも捲きこんでしつように続けられ、天正二年（一五七四）、前権大納言柳原資定（元亀二年江戸氏の菩提寺和光院の住職慶岳は京に上り、柳原の猶子（ゆうし）となって参内し、上人号を賜わった）は真言側の請託を聞き入れて、天皇の勅を故意に曲げ直して、絹衣着用を許可されたとのことを真言門徒に伝えた。この事情を察知した吉田薬王院以下の天台側では、朝廷に柳原資定の不正を訴え出たので、天正三年六月、資定は勅勘を蒙り参内を停止され、七月に青蓮院門跡から薬王院に対して、資定が出した綸旨を破棄することを伝えた。そして八月四日、朝廷から薬王院の檀那である江戸重通に綸旨を下して（13）、両宗門徒に対して、争論をやめておのおの先規のごとく本寺の命に従うように伝えさせた。

ところがその九月、水戸に下向した醍醐の戒光院深増が、薬王院に下された綸旨を途中で奪い取り、その内容を故意に変改して、真言宗徒にも絹衣着用が免許された、と真言側に告げて煽動した。深増が水戸で滞在した所は藤福寺（江戸氏の菩提寺）であり、その住職宥海は江戸重通と親しかった。水戸の和光院・藤福寺および六反田の六地藏寺などは、この地方の真言寺院の中心であった。その六地藏寺文書に、

「仁和寺・青蓮院・三宝院の三門跡が殿中で対決し、織田信長が天皇の御意向を伺った結果、仁和寺から絹衣着用の宣旨が下された」という書状が現在残っており、宛先は「関東諸談義所御同衆中」、差出は「道信」（仁和寺の役僧か）である。おそらく、この時出されたものであろう。

これに対して、天台側では深増を訴え、青蓮院からこの執奏を受けた朝廷では、真言宗の本寺である醍醐の三宝院に、真言門徒の絹衣着用のことを下問し、三宝院から深増の行為が不当であるとの奉答があったので、天正四年四月、再び青蓮院から、天台側の申分か認められた旨を薬王院などに伝えた。この時、江戸重通の態度は真言側に立ち、深増を庇護したので、薬王院はこれを不満としていたが、四月、天台側に有利な裁定を受けると、直ちに重通に対して、その態度を非難し、深増の処罰を要求している。こうして七月末、醍醐の三宝院門跡義演と理性院堯助から重通に対して、深増の不法、深増が変改した去年の綸旨の破棄、真言宗では院家以外の末寺平民の絹布着用禁止のことなどを通達した。

しかし天台側ではこの処置だけでは満足せず、薬王院尊仁みずから上京して深増の処分と真言寺院の嚴重取締りを要請した。その結果、九月、朝廷では真言側の申分か曲であることを再び認め、織田信長に深増の処罰を命ずることを定め、その旨を江戸重通と天台の水戸十カ寺に伝えた。信長はこの旨を奉じて朱印状を下し、また深増を処罰した。しかし信長は当時、石山本願寺の一向一揆と交戦中であり、その上、関東は彼の勢力外であったから、関心がうすく、また重通は真言側に好意を寄せていたので、真言宗徒は依然として絹衣を着用している状況であった。

これにたまりかねた水戸地方の天台門徒は、重通の不誠実を京都に

訴えたが、ついに効果がなかった。その上、天正十八年、江戸氏を滅ぼした佐竹氏が薬王院を一時真言宗の一乗院に変えるなど、天台側に不利な政策を強行したので、朝廷の裁定は少しも実行されなかった。この長年の争論に、ようやく終止符が打たれたのは、佐竹氏の国替えの後である（14）。

絹衣争論一件は、僧の法衣着用をめぐる争いでありながら、水戸地方の天台・真言両宗の勢力争いがたまたまこの事件に集中的に現われたもので、それぞれ京都の本寺、天台では青蓮院門跡、真言では醍醐三宝院門跡に波及し、ついに朝廷の裁決を仰ぐに至ったのである。しかし、これは平安時代以来の宗儀にかかわる争いであるから、当時衰えていた朝廷の力では、度々真言宗側の非分を申渡しても、少しも遵奉されず、天皇の綸旨も青蓮院宮の令旨も反故同様のていたらくであった。そしてこれには時の領主江戸重通の真言宗庇護の力が働いていることを考えると、全国統一が失われていた戦国時代に、地方割拠の小大名でも強い自立権力をふるっていた事情が判明するのである。

また水戸地方の真言宗が、当時発達して来た郷村に地盤をひろげ、領主の権力と結んでいたからこそ、これほど主張を押し通し得たのである。また天台の寺院が京都の本山の勢力に頼らなければならなかったことは、仏教界は本寺末寺の支配関係が次第に成立して来る情勢を示すものである。以上のように、絹衣争論は江戸氏の時代の水戸の歴史上、異彩を放つ事件であった。

臨濟宗

水戸地域に禅宗が発展したのは南北朝時代以降のことであるが、常陸にはすでに鎌倉時代から入っている。すなわち臨濟禅では、文永年中に仏源派の無象静照が多賀郡に興禅寺をひらき、仏光派の見山崇喜

が石岡に三会寺を、幻住派の復菴宗己が高岡に法雲寺を、さらに建治二年には南山土雲が大宮に松吟寺を開いている。このほか足利尊氏の帰依を受けた夢窓疎石が、その修行時代に常陸臼庭にいたことがある。このように、当時、奥州への通路にあたっていた常陸に禅宗諸派が伝わっていたが、南北朝時代以後とくにめざましく発展するのは、守護佐竹氏などが室町幕府にならって禅宗を庇護したためである。

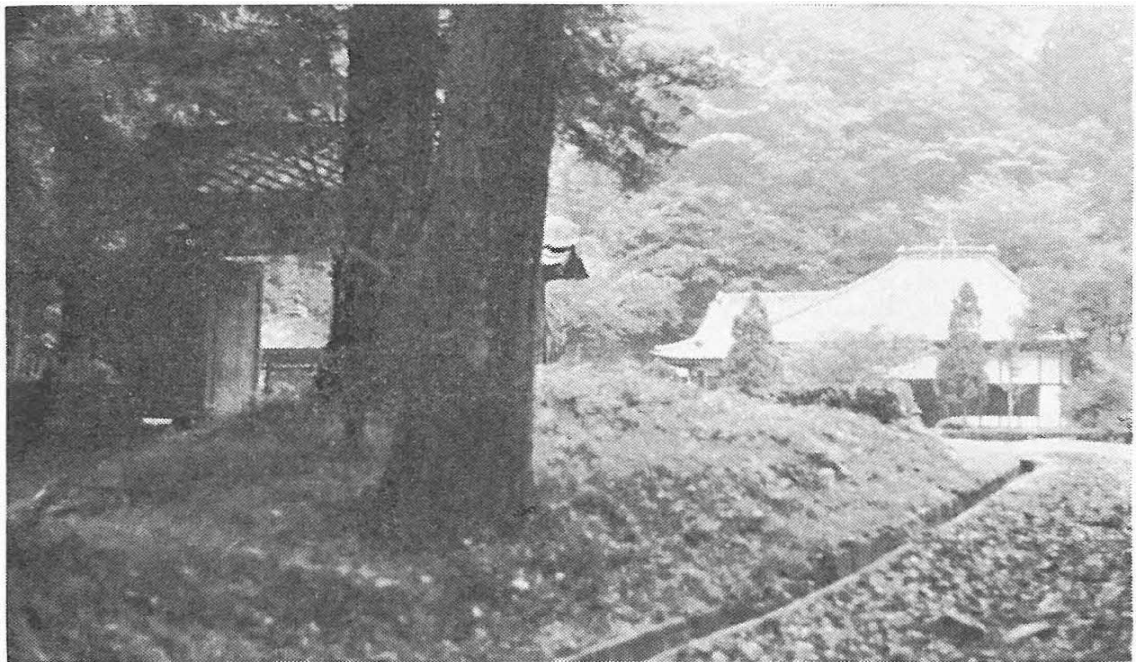


第 10 図 夢窓疎石頂相

茨城県指定文化財（常陸太田市 正宗寺所蔵）

その発展の有様を見ると、他の諸国の場合と同様、旧仏教寺院の改宗復興という場合が大半である。たとえば、のちに禅宗の官寺の格式である諸山に列せられた太田の勝楽寺は、もとは延長年間に鎮守府將軍平良将によって創建された真言律宗の寺院であったが、その後佐竹昌義のとき、佐竹氏の菩提寺となり、ついで佐竹秀義は貞応二年八月に正法院を建て、明菴栄西の弟子である建仁寺の仏樹房明全を招いて開山としている。ついで佐竹貞義の子月山周枢（応永六年入寂）は京都

にのぼって夢窓の弟子となり。ここに勝楽寺は夢窓を中興開山、月山を二世とする禅寺に改められ、寺域に正宗菴、のちの正宗寺が建てられた。こののち勝楽寺・正宗菴は佐竹氏の庇護によって、この地方の夢窓派の本拠となった（15）。このほか、月山は那珂郡静村（瓜連町）に静安寺をひらき、さらに瓜連に天祐寺を創めて高峰顕日を開山としている（16）。このような夢窓派との関係から、佐竹義篤は夢窓から春山の道号を贈られた。



第 11 図 清音寺の山門 — 常北町 —

他方では、夢窓派の発展と同時に、幻住派が進出した。すなわち、古内の清音寺はもと大同四年弘法大師の開基と伝えられ、さらに承和四年真雅が相続して、大聖教院浄光寺と称し、その後建久四年源頼朝の外護を得て、徳円が再興したといわれる。したがって、これまでの同寺は真言系であったが、文和元年末、佐竹義篤が父貞義の百日忌のためこれを再建し、禅院に改めて太古山清音寺とし、法雲寺の復菴宗己を招いて開山とした（17）。本尊釈迦如来および脇仏は観応三年に院遵・

院広・院吉によって合作されたもので(18)、いまは静岡県引佐(いなさ)郡奥山の方広寺の本尊となっている。ついで、上古内に末寺の祥雲寺が開かれ、さらに応安六年、笠間の楞嚴寺に大拙祖能が入寺した(19)。そののち、文和元年には溪翁(康安元年入寂)が清音寺の末寺として渡里の香積寺を開いた。溪翁の後、丹月・梅雲・瑞芳などが住し、永禄・元亀の頃、江戸忠通の帰依をうけたが、兵火のため堂宇を焼失した。

なお、大野郷に大覚派の大雲寺という寺があり、正長二年のころ省樹が住した。おそらく、もと大掾氏一族大野氏の菩提寺であったのであろう(20)。この他、鹿島郡の福泉寺を大掾高幹の三男忠幹が再興している。

このように、南北朝時代以後の常北地方では、禅宗諸派がかなり展開しているが、水戸には天台・真言とくらべると、さして目立った発展は見られなかった。このことは、佐竹氏が室町幕府と密接な関係を持つとともに、足利氏と関係の深い禅宗を外護し、佐竹寺などを中心とする旧仏教文化をはなれて、新しい禅文化を吸収したのに反して、大掾氏が天台、江戸氏が真言及び曹洞と深い関係を持ち続けていたためではなかろうか。

曹洞宗

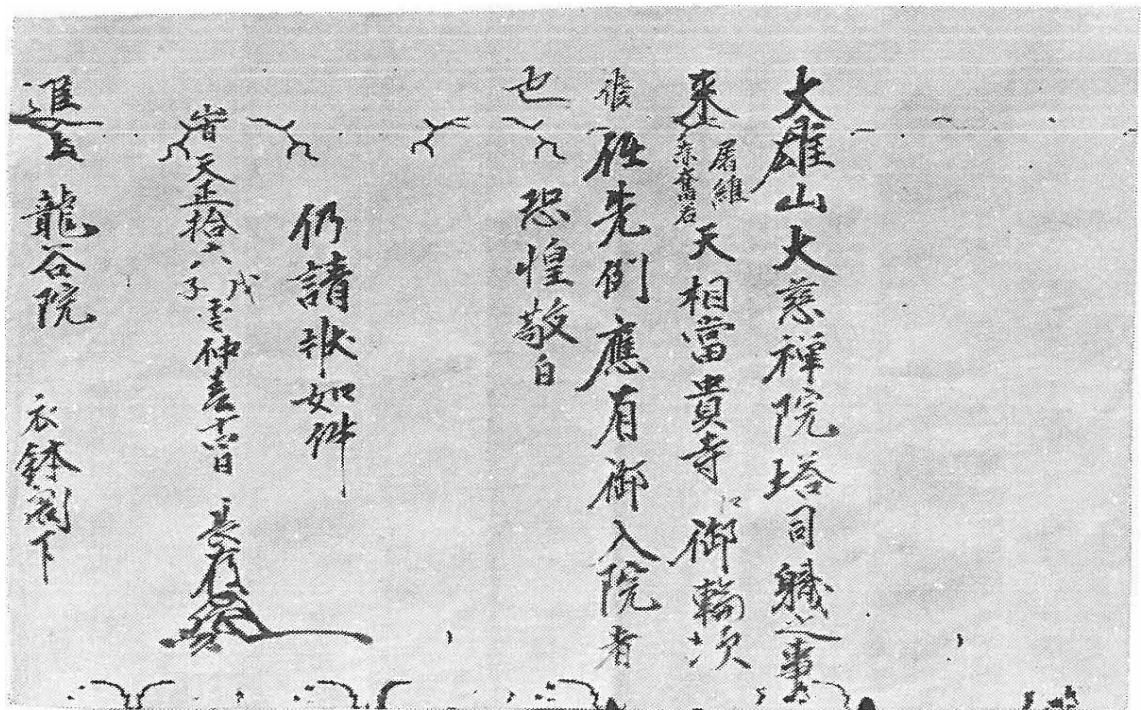
曹洞禅は文永四年に佐竹長義が道元の弟子詮慧を迎えて、檜沢村(美和村)に陽雲寺を開いた時に始まる(21)。これは同宗が東国に伝わった先駆をなすものとして注目されるのであるが、何故かこれに続く展開が見られない。

南北朝以後になって、佐竹義仁(よしひと)が太田の西、新宿村山吹(常陸太田市)に耕山寺をひらき、楠木正成の孫にあたる傑堂能勝を開山とした。その後、応仁・文明の頃、同寺は沢山に移された。

このように曹洞宗は太田地方へは比較的早くから伝わったが、水戸その他の地域への進出は室町時代なかば頃以降である。そのころ、総持寺系の了菴慧明か相模の真言宗最乗寺を曹洞宗に改め、その法系が最乗寺を中心として関東一円に流布した。まず日立地方では南極寿星（延徳二年入寂）が小野崎朝通の帰依を受けて大雄院を開いてから、同門派がにわかに流布し、その弟子信中永篤は文明十三年、美野里村竹原の城主竹原義邦に招かれ、大雄院末の鳳林院をひらいた。この寺の二世雪溪道瑞は小野崎義忠の帰依を受けて、文明十六年、那珂郡石神（東海村）の長松院を開き、水戸の払沢に東漸院をはじめた。同寺はのちに成沢に移された。雪溪は最乗寺五十五世となり、本山永平寺にも瑞世（ずいせ）した人である。なお、信中の弟子陽室長淳も小野崎義忠の請いによって、大永五年、高長寺をひらいた。

このほか、南極の兄弟子（伊豆普門院の模菴宗範の門弟）秀峰存岱（永正十三年入寂）が、長禄三年（一説長享元年）大山城主大山義成を開基として、東茨城郡下阿野沢（桂村）に竜谷院をひらいた。秀峰はその後、最乗寺に住し、さらに本山永平寺に瑞世した。竜谷院二世無学宗芸もまた最乗寺・永平寺に住した。また秀峰の門弟天海舜政は佐竹義高の帰依をうけ、石塚（常北町）に太寧寺をひらいた（22）。このほか、同じ最乗寺の了菴の法系で、下野大中寺の系統もまた水戸に進出した。すなわち、大中寺開山快菴妙慶三世の孫である独放鈍聚が円通寺の中興開山となっている。同寺はもと常磐山（現在東照宮の社地）にあり、天台宗で弥富寺といい、元亨三年恵童によって創立され、建武年間には恵童が住していたことが知られ（23）、大掾一族の外護をうけ、その菩提所として栄えていた。その後応永末年、大掾氏が水戸から後退したのち衰えたが、文明年中、江戸通泰が通房の孫にあたる独放（大

永四年入寂)を中興開山に招いて曹洞宗に改宗してから、江戸氏の庇護をうけて再び隆盛となった。独放は上野竜源寺開山培芝正悦の法を継ぎ、同寺の第二世となり、また結城政朝の外護をうけて結城の孝顕寺の開山となっている。独放の後は笑顔正忻(天文五年入寂)、雪庭梵立(弘治三年入寂)、華顔景泰(元龜三年入寂)とつづいたが、天正十八年、江戸氏の滅亡とともに中妻村大足(内原町)の安国寺の地に移され、円通寺の址には文禄二年、太田から同じ大中寺系の天徳寺が移された。この寺は慶長七年、秋田へ移ったが、水戸では正徳二年河和田の伝舜菴の址に再建されて今日に至っている(24)。その後、大足の円通寺は寛永初めに細谷村(市内)へ、ついで吉田の古宿へ、さらに蒼竜寺のあった払沢の地に移されて今日にいたっている。華顔はまた内原村三湯(内原町)に楊林寺をひらいた。開基は揚翁道絮禅定門(俗名不詳)である(25)。



第 12 図 最乗寺の塔頭大慈院塔司職招請状

天正十六年二月十四日(桂村竜谷院所蔵)

なお、河和田城主春秋幹安は、嘉吉三年八月十三日に父幹治が没したので、その菩提を弔うため、河和田に伝舜院をひらき、岩城三春の竜穩寺開山月泉正印の門弟通海良義を請じて開山とした。そののち幹安が没するや、子幹勝は父のため泉溪寺を建立した。このほか、慶長四年十一月には晶山を開山とした昌伝院が、伝舜院末として河和田にひらかれている。

このように、水戸地方に曹洞宗が盛んに発展したのは室町時代後半からで、江戸氏及びその家臣など領主層の勢力を背景として、その教線を拡張していった。

- 注 (1)・(3)「薬王院文書」、この項の記事はこの文書及び「薬王院過去帳」などによる。
- (2) 薬王院所蔵、他に天正七年三月などの棟札の写を、「薬王院文書」、「常陸遺文」に収む。
- (4) 白雲山開基来由
- (5)・(6) 小松寺所蔵、「願行流血脈」
- (7) 小松寺文書
- (8) かつて東京大学国史研究室で、恵範の書写本その他六地藏寺の聖經・文書などを目録に取った。
- (9) 和光院の事は、「和漢合運」(彰考館本)「土貢済期帳」(天文二十一年、以上「水府志料附録」一 所収)「和光院過去帳」(同寺所蔵)による。
- (10)「新編常陸国誌」
- (11)「色川本岩城文書」
- (12)・(13)「願泉寺文書」(和泉)
- (14) この事件の記事は、「願泉寺文書」・「青蓮院文書」・「薬王院文書」・「輪王寺文書」・「六地藏寺文書」・「京都御所東山御文庫記録」などによる。

- (15) 「正宗寺記」
- (16)・(18) 「常陽雜錄」
- (17) 「開山大光禪師語錄」
- (19) 「前住建長大拙和尚年譜」
- (20) 「雲頂菴文書」
- (21) 「耕山寺記」
- (22) 「竜谷院文書」
- (23) 「円通寺文書」
- (24) 「河和田邑故城考」
- (25) 「楊林寺過去帳」

第四節 仏教諸宗の発展（二）浄土・真宗・日蓮・時宗

浄土宗

法然が専修念仏をとなえてから、その教えが関東に伝わるまでには、さして歳月がかからなかった。関東では浄土宗信仰の成立の前提をなす念仏思想、阿弥陀信仰が既成の天台宗を通して早くから発生して、天台宗だけでなく真言宗でさえも念仏を修する傾向が強かった。当時鎌倉と並んで関東の文化の先進地であった下野宇都宮では、宇都宮氏の一族頼綱・朝業などが法然の門に入った。しかし水戸地方に浄土教が発展したのは、南北朝時代以後のことである。

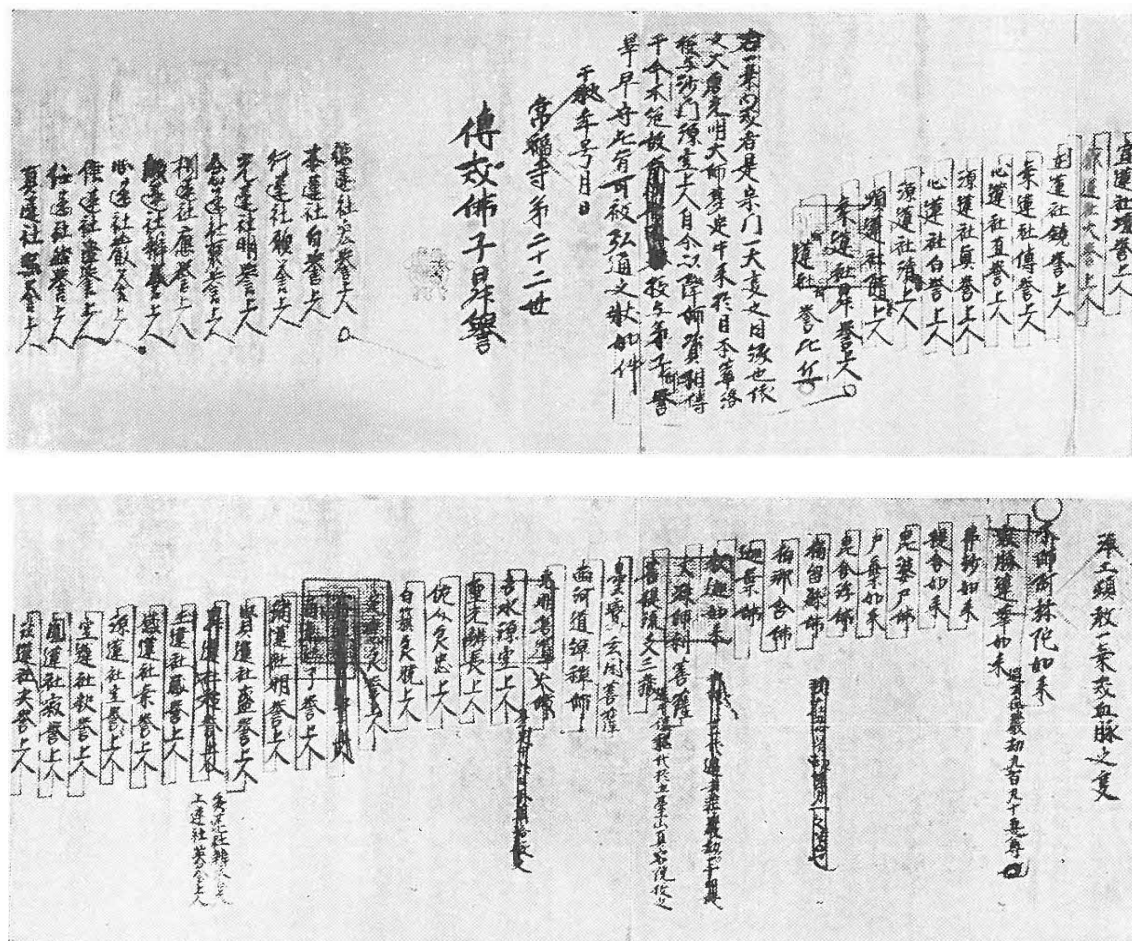
これよりさき、聖光房弁阿の弟子良忠は、正嘉二年鎌倉に光明寺の基を開き、関東へ浄土宗の鎮西派が発展する足場を築いた。良忠の門下の寂恵良暁の弟子蓮勝永慶が、佐竹義篤の庇護のもとに、建武三年に太田の木崎に法然寺を建立した。これが常北地方に浄土宗の鎮西派

白旗流が伝わった端緒である。蓮勝は佐竹義行（一説には義繁）の子といわれる。こののち、法然寺は天文年間に佐竹義重のとき田中重氏によって再建され、瓜連常福寺十二世法蓮社香誉が中興開山となっている。以来常福寺末となり、その後、慶長元年に現在の常陸太田市東三丁にうつされた（1）。

法然寺について、延文三年佐竹義篤が瓜連春川に常福寺を建てた。開山は盛蓮社成阿了実（至徳三年入寂）である。はじめ法然寺の蓮勝に学び、のち鎌倉光明寺の良誉定恵に師事し、一代の学匠の誉れが高かった。常福寺二世西蓮社了誉聖問の父は佐竹の一族、上岩瀬の城主白石志摩守、母は小田治久の女である。了誉は釈浄土二蔵頌義・浄土伝戒論など多く著述して、浄土宗の教義の体系化につくした。そして嘉慶二年、僧坊が全焼したので、佐竹氏の援助をうけて、応永十二年、常福寺を瓜連城址に移して再興した。同二十二年、同寺を満蓮社明誉了智にゆずり、自らは弟子の増上寺開山西誉聖聡の招請をいれて、江戸小石川の談所（のちの伝通院）にうつった。応永二十七年九月二十七日寂、才八〇。了誉の門には学徒が雲集し、宗風が大いに宣揚された。こうして浄土宗発展の基盤が確立し、これまで浄土教の僧侶は専修念佛を行なっていたても、教団は天台に属す形をとっていたが、ここに一宗として独立することができた。したがって、関東浄土宗の中心は鎌倉光明寺から常福寺に一時移行したかの観があった。

こののち、常福寺九世源蓮社空誉玉泉（天正十六年入寂）は、大永元年江戸忠通及びその室清岩禅定尼の帰依をうけて吉田古館に清岩寺をひらいた（2）。永禄十年春には清岩寺の七堂伽藍を修築し、このほか額田の心岩寺、弘治元年に那珂郡小場村（大宮町）の一心院、下江戸の江月菴、石塚の雲生寺、前小屋の光宗寺、久慈郡国安の医王寺、陸奥棚倉の安楽寺をはじめた。清岩寺はその後、文禄三年に元吉田町の現在地

にうつされた。



第 13 図 浄土頓教一乗戒血脈 (瓜連町常福寺所蔵)

また天文三年、玉泉は藤沢小路に善徳寺をはじめた。慶長八年九月十一日、水戸城主武田信吉が没するや、遺骸を同寺に入れている。のちに同寺は大串にうつされた。さらに、永禄十二年、久慈郡松栄（金砂郷村）の高仙寺四世願蓮社行譽（天正三年入寂）が酒門に定善寺を建てた。天正末年には、下野大沢の円通寺から来た観蓮社良残（寛永二年入寂）が、谷中の光台寺をひらいた。開基は佐竹義宣である。

このように、水戸は浄土宗の淵叢をなした瓜連常福寺に近かったの
で、同系の寺院がいくらか建てられたが、とくに同宗が水戸近辺の大

勢力に発展することはなかった。これはそのころ江戸氏の絶大な庇護を受けたばかりでなく、郷村社会の発達に巧みに歩調をあわせた真言寺院勢力に打克つことができなかったためであると共に、やがてその勢力の中心が江戸伝通院へ移行してしまったからであろう。

真宗

常陸は親鸞の稲田移住によって真宗史上輝かしいページを開いた所であり、とくに水戸は稲田に近く、親鸞の直弟子唯円房が河和田の榎本に道場を開き、親鸞もしばしばここに来て布教したと伝えられる。しかし親鸞の帰京の後、その教えはあまり発展しなかった（第六章第四節参照）。現在、河和田の報仏寺は唯円房の道場を承継いだ寺と伝えられるが、ここの本尊阿弥陀如来の台座下面に次の墨書がある（3）。

当寺開基唯円大徳 正応元年戊子八月八日

唯証 正和二年四月三日

了証 建武四年十二月十日

了円 貞和元年三月十日

宗円 応安五年二月十八日

宗順 至徳二年二月六日

宗慶 応永廿二年六月□日

了慶 永享十二年四月九日

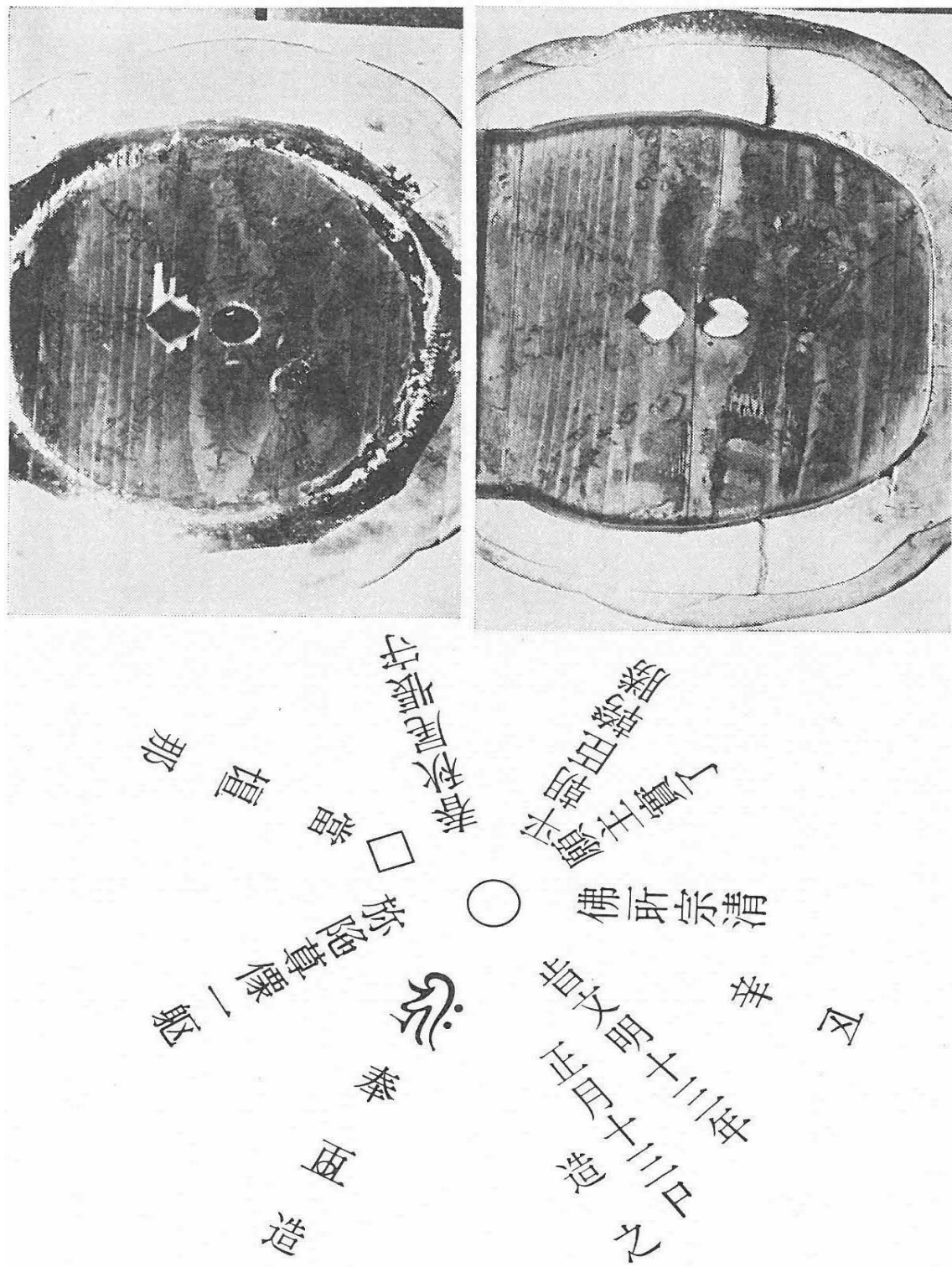
慶祐 宝徳元年正月廿日

実了 大永三年九月廿七日

これはおそらく歴代の道場主であろう。また台座の上面には、第十四図のような銘文（4）が記されている。この阿弥陀像は文明十三年春

秋尾張守幹勝を檀那として実了が願主となって再興したというのである。実了は前掲の歴代道揚主のうち最後の人であるが、その後の記載がないのは、兵火によって退転したためであろう。その時期は天正十八年、春秋氏が江戸氏と運命を共にした時ではなかろうか。その後、一寺が河和田の竹内、おそらく泉溪寺（前掲曹洞宗の項参照）の跡に建てられ、さらに元禄二年河和田城址の内に移されたものが、報仏寺だということになっている。同寺には、本尊阿弥陀仏のほかに、古色を帯びた阿弥陀仏像・光明本尊・親鸞上人御影・報仏寺略縁起集・弥陀絵像三幅・六字名号・九字名号などの寺宝が伝えられる。

この他、大永二年、鎌倉の武士筑後入道尊念の一族で如実という者が常磐村（市内）に来住して林光院をはじめた。その後同寺は酒門にうつされた（5）。ついで、永禄十年には斎藤景直が出家して空円といい、渡里村堀（市内）に光円寺を建てた。同寺はその後寛永二年に鍛冶町（市内）へ、さらに酒門に移された。



第 14 図 報仏寺の阿弥陀像台座の銘

上右に歴代の道場主を列記した台座下面、上左は文明十三年の造像銘を記した上面、下はその銘文（河和田町報仏寺所蔵）

これよりさき、茨城郡幡谷（小川町）の信願寺は、親鸞門徒の唯信房が建てた寺で、享禄元年に唯空によって久慈郡に移されたが、天正七年唯正が遺跡を継ぎ、水戸の藤沢小路に移した。さらに、同十八年旧寺町、慶長十年城下並松与力町に、ついで延宝九年に現在の場所に移った。

また親鸞の門下善念房が、久慈郡東門部村に建てた善重寺は、その後退転して村田常弘寺内にうつされ、天正十四年善空房によって常磐村（市内）に、さらに酒門にうつされて今日にいたっている。なお、当寺には国指定重要文化財（旧国宝、大正四年八月十日指定）の聖徳太子立像があるが、これは水戸藩主徳川光圀によって他寺から移管されたものである。

以上のように、真宗寺院の発展は多くは見られない。

日蓮宗

水戸の日蓮宗では、鎌倉時代に加倉井の領主波木井氏（加倉井氏を称す）によって建てられた加倉井妙徳寺が、その後室町時代にも加倉井氏歴代の篤い信仰を受けて続いた。次に同寺に現存する棟札（6）によって、再建の歴史を見よう。

まず、康正元年、日瓊の代に加倉井幸久によって再建された。大檀那は江戸修理亮（通秀）の母で、修理亮が代官をつとめ、加倉井直久・光久・宗久ら僧俗多数が助縁している。

文明八年春、加倉井氏の援助で、上加倉井の妙用寺を妙徳寺の背後の地へ移転して造営したが、同時に妙徳寺の上葺も行なわれ、翌九年入仏式を行なった。

大永二年には、加倉井外記助以下の武士から百姓衆にいたるまで僧俗男女三百余人の寄進をえて再建した。次の天正十二年の改築のとき

の棟札によると、勸進の僧俗として、次のとおり多くの人々の名が記されている。

十乗坊（式部卿日妙）妙徳寺 宇留野源太郎殿 加倉井讃岐守内儀

大乘律師 大旦那（江戸重通） 同 息女千代女

泉湯坊 加倉井与三郎殿朝久 同 千代女

妙法坊 加倉井讃岐守殿重久 同 増女 己之女 蔵之女

六位阿 同 淡路守殿 下村（成沢）加倉井小鳥女

台圓阿 同 三郎左衛門殿 加倉井四郎衛門内儀

正承阿 同 四郎衛門殿 水戸讃岐女

秀蔵坊 柳橋大学助殿 同 所あさゝ女

治部卿 加倉井源三郎殿 同 ふんこ女

大経阿 宇垣伊賀守殿 加倉井善七郎

千行阿 安土備前守殿息女千代寿 鹿野常慶入道

大蓮阿 加倉井宗衛門殿 石沢丹後守内儀

実相阿 同勘ヶ由殿 後藤讃岐守

学湯阿 同（成沢） 大蔵殿 随洗（かたの）齊入道

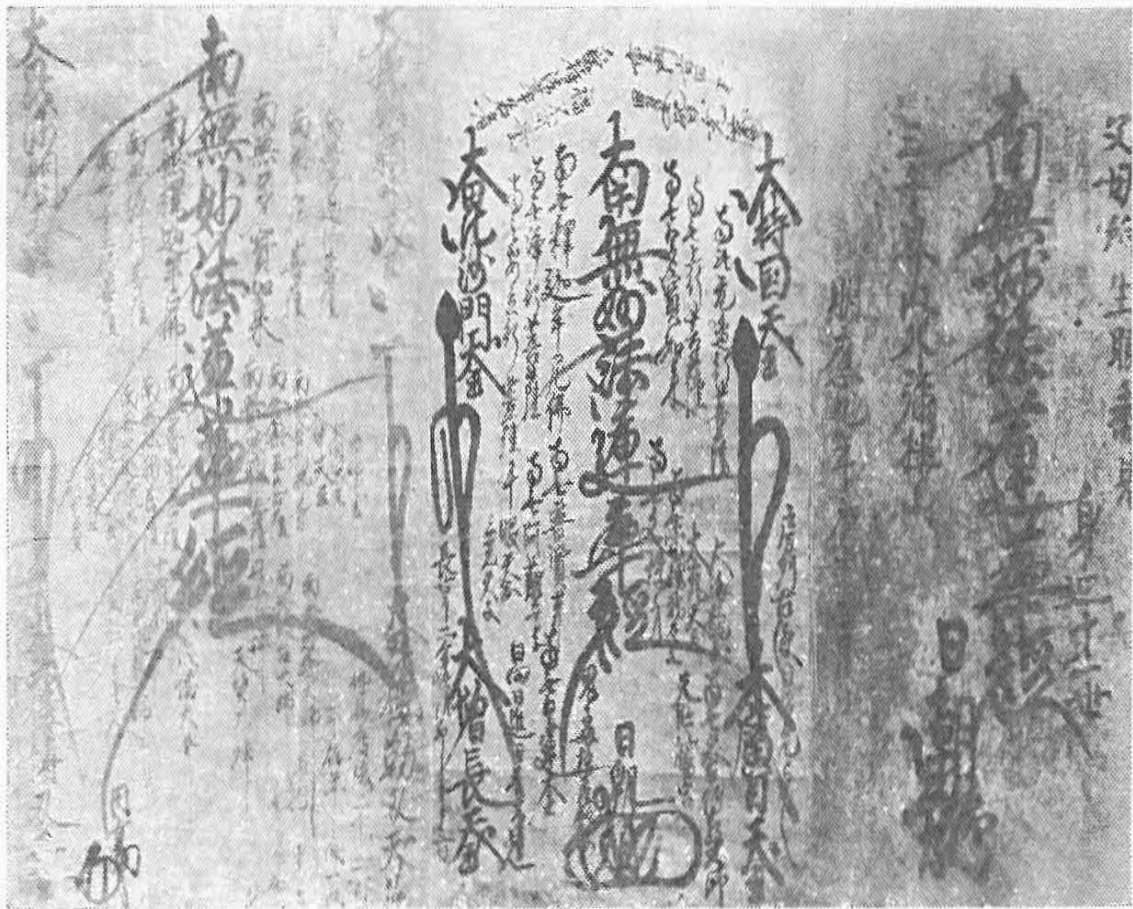
慶湯阿 同 馬助殿 加倉井（かふう）新三郎

[] [] 大高大学助

加倉井筑後守息女

大内馬助

綿引隼人



第 15 図 日高・日朝の曼陀羅 (加倉井町妙徳寺所蔵)

その後、慶長十一年にも加倉井主税介・同藤三郎・同源七郎らを本願とし、綿引彦太郎など多数の男女を助縁として再建入仏が行なわれたが、加倉井氏・綿引氏などは、天正十八年江戸氏滅亡の後、帰農したものである。なお、助縁者の中に女性が少なくないが、これは一般に日蓮宗が女性に信仰されたためで、同宗の特色の一つが水戸の一寺院の信徒にも現われていることは、興味ふかい。

妙徳寺には、棟札のほか宗祖の筆蹟三点・日高筆の曼陀羅・日朝筆の曼陀羅・過去帳・御隠井八幡之縁起などが寺宝として伝えられ、今に残る加倉井館址と加倉井氏の子孫の家と共に、遠い世々の跡を物語っている。

この妙徳寺のほかに、日蓮宗は久しく発展しなかったが、江戸氏の時代の後半期になって、ようやく各地に展開するようになった。すなわち、天文年中に日受が成沢に妙徳寺の末寺蓮聖寺をひらいた。ついで永禄元年には、下総中山法華経寺日院の高弟日慈が水戸城下に蓮乗寺を開いている。同寺はのちに木沢村、ついで古宿にうつされた。

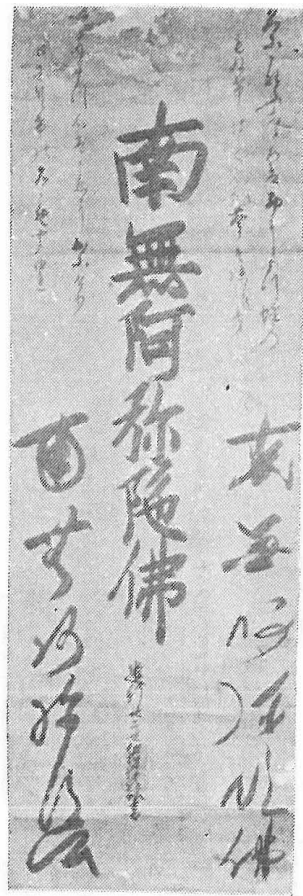
さらに佐竹氏の時代及びその後のことを便宜付け加えておこう。慶長三年七月、妙徳寺日尚は佐竹の臣宇垣伊賀守・商人笹島越後守（法名浄真）・竹田利菴らに招かれて、水戸上寺町に本行寺をはじめ、池上本門寺十二世仏乗院日愷を勧請開山とした。徳川氏時代に入り、日尚は同寺の傍、浄土宗光大寺の僧と宗論して、宗論禁止の国制に触れ、江戸の獄舎につながれて慶長十六年正月獄死した。江戸幸立寺に葬る(7)。その後本行寺は天和三年渡里村堀に、ついで貞享元年十月現在の南袴塚（上水戸四丁目）にうつされた。

時宗

時宗は真宗のように浄土教から分かれ出たもので、常に平生を臨終と心得て念仏すべしと説き、宗祖一遍上人にならって、代々の遊行（ゆぎよう）上人が全国を遊行して住生札を配って歩き、また念仏踊りを行なう、特異な民衆的性格の宗派である。この宗派が水戸地方に進出したのは、比較的はやい時期であった。すなわち正中元年（一三二四）太田城主佐竹貞義が母（二階堂頼綱女）のために太田浄光寺を開いたのにはじまる。同寺の開山呑海は相模の人で有阿と号し同国の無量光寺で、他阿真教・智得などについて宗義を学び、のちに京都の七条道場金光寺に住し、元応元年、智得の後を継いで第四代遊行上人となって諸国を遊歴して民衆を教化し、正中二年、相模藤沢の極楽寺址に清浄光寺をはじめ時宗を中興し、嘉暦二年（一三二七）二月六三才で入寂し

た。したがって、太田の浄光寺は清浄光寺の開創より一年前に建立されたわけで、こののち東国における時宗の一大道場として重要な地位を占めた。

ところが、その後この地方の時宗については、延文元年（一三五六）田野の光明寺（現在那珂湊市）が白木上人陀阿によって開かれたことが知られるだけで、他に教団発展の痕跡を残していない。



第 16 図 他阿上人筆の名号 （元山町神応寺所蔵）

しかしこれは時宗が寺院中心でなく、諸国遊行を重んずる特質にもよること、全然発展しなかったとは断定できない。時代は下るが、佐竹氏の水戸占拠によって、この地に時宗の一大根拠が出現した。すなわち、佐竹氏は従来、太田浄光寺によって時宗と密接な関係があったから、天正十九年（一五九一）三十二代遊行上人普光を開山として、水

戸城西の地に時宗の道場を開いた。普光は佐竹義宣の一族である小野平城主小野義高の次男で、はじめ太田の浄光寺に入ったが、やがて遊行三十二世、他阿上人となり、諸国を遊行すること六年、天正十七年秋、法灯を遊行三十三世満悟にゆずり、相模藤沢の清浄光寺の住持となった。ところが翌年、小田原城陥落の時、同寺も兵火のため灰燼に帰ってしまったので、普光は出身地の小野平に帰寓した。ついで義宣に招かれ、天正十九年、水戸の大坂雷神に詣でて、城西の神生平（旧藤沢小路）に一寺をはじめて藤沢道場と称し、雷神を境内に移し鎮守とした。義宣は田谷・国井・長岡の地三百石を寄進し、さらに文禄四年初秋にも柏井・長菟路の地三百石を加増し、また同年十一月九日、同寺に制札を下した。こうして、義宣の外護によって、時宗の本拠である清浄光寺はしばらくの間水戸の藤沢道場に移されたのであった。しかし、慶長年中になって藤沢清浄光寺の旧址が復興されたので、普光も藤沢に帰り、寛永三年五月二十三日、八四才で同寺に寂した（8）。水戸の藤沢道場は寛永十年二代其阿上人のとき神応寺と改められ、ついで延宝八年現在地に移された。このように、水戸が一時、民衆的色彩の濃い時宗の本拠となっていたことは興味深い。それで佐竹時代のことをここに合わせて記した次第である。

仏教発展の意義

以上で仏教諸宗派の発展を概観したが、その意義は郷土文化の上でも、仏教史の上でも、更に日本史全体を考えるためにもすこぶる重要である。

第一、真言宗・曹洞宗をはじめ諸宗に、名僧学匠が少なからず現われた。彼らはただ水戸地方または常陸の宗教文化の発達、人心の教化に力を尽しただけでなく、他国の諸大寺にも住し、また本山、たとえば真

言の長谷寺、曹洞で永平寺などの住職となったものもあって、仏教史上に大きな足跡を印した。

第二、諸宗の僧は諸国の名高い大寺で学び、さらに京都や比叡山・高野山・根来寺・長谷寺・永平寺・総持寺などの本山で修行し、帰国して法門を開いたので、一般に中央の文化を郷土にもたらすこととなった。また天台・真言の絹衣争論を例とするまでもなく、仏教界は領主階級の分立割拠の障壁を乗り越えて宗団組織を作っていたので、これが封鎖的な地方生活を開放する一因となった。

第三、寺院が領主の城下だけでなく、郷村にまで建立されはじめたので、郷土文化の開発に大きな役割を果たした。そして平安朝以来、大寺院が支配階級の生活を基盤として教法の權威を誇る貴族的信仰形態よりも、講などの組織で信徒を集め、多くの人々が法会につらなる民衆的信仰形態が盛んとなった。たとえば陀羅尼講・門徒講などを作り、あるいは太鼓念仏を行なうなど、ひろく民衆を集め、その寄進をもって寺の再建、道橋の工事が行なわれるなど、仏教と民衆生活との関係を示す実例はとくに真言宗に多い(9)。

第四、日本歴史上、仏教の占める地位はまことに重要であるが、従来の仏教史学では、主として朝廷・幕府などの宗教政策、宗派の開祖その他高僧の信仰と伝記、諸大寺の歴史などが研究され、諸地方の郷土史の立場から仏教の文化史的意義を重視するものはほとんどない。しかるに水戸地方の仏教史を宗派毎に調べた結果、この関東の一地方の仏教が全仏教史上でも軽視できないものであることが判明した。

第五、従来の日本史の考え方では、室町時代は政治社会の規律がみだれた時代であるとして、鎌倉時代や江戸時代にくらべて高く評価されない傾向がある。そして仏教史では、仏教渡来、聖徳太子、奈良仏教、伝教大師と弘法大師、平安仏教の衰退、鎌倉新仏教の発達という線

が常識のようになっている。しかし仏教が真にひろく民衆生活のものとなったのは、室町時代である。水戸地方（法系の関係から太田・府中あたりまで便宜ふくむ）の諸宗寺院の創建（中興をも便宜ふくむ）の年代を調べて、時代別（南北朝時代も便宜室町時代に入れる）に統計を取ると、第三表となる（水府寺社便覧・寺伝などにより、確証のないものもいくらかあるが、しばらくその伝に従った）。

この数字が仏教史上、室町時代の重要性をはっきりと示すのである。前に記したように、神社の建立が多いのも、またこの時代である。社寺の発達は水戸地方だけの特殊なことではなく、他の地方でもこのような研究が行なわれれば、たとえ宗派ごとの違いこそあれ、総体として同様な結果が出るであろう。とくに戦国時代といえ、すぐ戦乱と兵火を連想する時代に、寺院の新建・再建が少なくないことは、この時代史に対する従来の考え方を反省させるものであると思う。

第3表 時代別水戸地方諸宗寺院建立一覧

	天台	真言	臨濟	曹洞	浄土	真宗	日蓮	時宗	計
平安時代	二	六	一	一	一	一	一	一	八
鎌倉時代	八	一	四	一	一	五	一	一	二一
室町時代 佐竹時代	一	五二	九	一四	一四	二	三	二	九七
合計	一一	五九	一三	一五	一四	七	四	三	一二六

注 (1) 常福寺所蔵、「末山由緒書」、以下同じ。

(2) 「清岩寺過去帳」

(3) この台座下面の墨書は、台座の新たな修理によって文字が不明となった部分もあるが、常陸遺文および真宗史蹟大観を参考として、全文を知ることができる。江戸時代の墨書と思われる。

(4) この台座上面の銘文は下面の歴代道場主名とは違う筆で記され、文明

のものとしてよかろう。

- (5) 「常陸遺文」にも収む。
- (6) 「常陸遺文」十、法栄山本行寺開基由来旧記写
- (7) 「常陸遺文」十、日尚聖人行実
- (8) 「常州水戸藤沢山神応寺並鎮守雷神宮濫觴之略説」
- (9) 「六地藏寺過去帳」・「諸草心車鈔」